

〔論 文〕

日本の王充研究論著目録および内容提要

The list and the resume of the papers and writings
about the study of WANG Chong (王充) in Japan

鄧 紅

DENG Hong

(本稿は大分県立芸術文化短期大学2003年度共通研究費の研究成果。)

論 者 の 話

戸川芳郎氏著『漢代の学術と文化』(研文出版2002年版)には、戸川芳郎著「四庫全書總目提要「論衡」譯注並びに補説」(『お茶の水女子大学人文科学紀要』21-3、1968年3月)、滝野邦雄著「王充研究論考目録(1968—1982年)」(『中国研究集刊』地号、1985年6月)と井ノ口哲也著「王充研究関係論著目録—1983年—1996年」(『中国研究集刊』往号1996年)の三点の王充研究論著目録をまとめ、井ノ口哲也が大幅に補正し編成した「王充・『論衡』関係研究論著目録」が載せられている。その中の日本語の論著部分をピックアップして、「日本の王充研究論著目録」を作ることができた。なお、その「目録」は1996年までであったので、1997年—2002年までの分は、論者が歴年の『日本中国学会報』付録「学界展望」を利用して補足したものである。

論者は1987年から王充研究に取り組み始め、それから日本語で著された王充研究の論著の収集に努めてきたが、一部分しか集められなかった。2002年に上記の目録が出てから、それに基づいてこれらの論著をインターネットで検索し、様々な方法を駆使してほとんど入手した。愚かな方法ではあるが、まずこれらの論著の字数を数えて、その結果を各目録に記した。

そしてこれらの論著を一通り読んだ。それを通じて、日本の王充研究の成果は三つのジャンルに分けられることが明らかになった。一つ目は、哲学思想研究の分野、それを「思想」と記し、二つ目は王充の伝記、解説および王充研究に関する資料的なもの、それを「資料」と記し、三つ目は王充の哲学思想以外の領域の研究、たとえば文学、語学など、そして王充研究の視野を広げるために王充と別の歴史人物および思想流派との関わりを研究したもの、それを「関連」と記すことにした。

王充研究の各論著を読みながらメモ式の評論文を書いた。『四庫全書總目提要』を真似て、それぞれの評語を目録の後に付した。その評価に基づいて、上記の三つのジャンル別に、これらの研究成果の格付け(ranking)を試みた。格付けをA、B、Cの三級とし、Aは「王充研究を行うには参照しなければならない論著」、Bは「参照してもよい論著」、Cは「参照しなくてもよい論著」である。この格付けはあくまでも自分の研究のためのものであり、私的な研究

の参考指数に過ぎなかったが、躊躇いながらも公表することにした。読者にこの格付けを「仁者見仁、智者見智」の目で見ていただければ幸いである。

ただし、日本でもっとも多く王充研究の成果を発表した大久保隆郎氏の論文群については、大久保氏はいまそれらを修正して一冊の大作にまとめる作業をしていると聞いているので、その上梓を待ちつつ評論を控えることにした。大久保論文群について、井ノ口哲也氏は「日本の王充研究——戦後の研究を中心に——」¹の中で次のように論評している。

戦後日本の王充研究を黙々と推進し且つ牽引してきたのは、むしろ大久保隆郎による王充研究ではないか、ということである。

大久保は、文革前夜に論文「王充の薄葬論について」(『人文論究』26、1965年12月)で斯界にデビューして以来、約30年間、王充とその関連思想の研究に没頭し、これまでに約30篇の王充研究の論文を発表してきた研究者である。大久保の約30年にわたる王充研究は、(一)王充自身の個別テーマの議論に関するもの、(二)桓譚から王充への思想的影響に関するもの、(三)王充の生涯にわたる学問的営為を詳述したもの、(四)『論衡』執筆の背景を考察したもの、(五)日本の江戸期の王充研究を述べたもの、の5つに大別される。(一)は、王充の議論の豊富な内容に従って大久保の所論も薄葬論・典籍批判・佞人論・習俗批判・妖祥論・頌漢論など多岐にわたる(注19)。大久保が一つの大きな構想のもと、まとめて論じているのが(二)と(三)であり、(二)は、大久保が3回に分けて述べた論文「桓譚と王充」を指す(注20)。桓譚と王充の両者の神仙思想・死生・祭祀に関する見解を比較し、桓譚から王充への思想的影響の程度を考察したものである。(三)は、大久保が王充の幼少期から晩年までを8回に分けて詳述した論文「王充伝私論」を指す(注21)。王充の出自や洛陽での遊学活動、さらには王充の文章論・文体について論じている。(四)は、王充の生きた明帝期・章帝期の治世を描き、その時代情況が王充の執筆活動にどう影響したかを考察したものである(注22)。(五)は、江戸期の『論衡』研究の推移に着目した論文であり、筆者が本稿第一章を執筆する際に用いた情報源にもなっている。

大久保による王充研究が従来のそれと異なるのは、王充の生きた時代情況とその生い立ちとに密着して王充の活動を王充のおかれた立場にしたがって丹念に論述している点と、長年にわたって研究し続けたことにより王充自身の論理に内在する諸問題を網羅的にとりあげて論じることができた点と、江戸期の『論衡』研究に着目した点の3点である。前二者は、長年にわたって王充に執着して研究してきたことによってのみ成し遂げられる研究であり、筆者は日本の王充研究にとって貴重な財産である、と考えている。また、江戸期の『論衡』研究については、日本の国文学研究者にも注目されている数篇の論文が発表されているが、中国学の領域では江戸期の『論衡』研究を活かしきれておらず、今後の積極的な利用が期待される。その意味で、大久保の功績は、その道を開いた点に求められる。

上記の作業を行いながら、論者は中国語で「日本的王充研究：綜述篇」という文章を書いた。また、井ノ口哲也氏に依頼して「日本の王充研究——戦後の研究を中心に——」を書いてもらい、論者はそれを中国語に訳した。その二つの文章は2003年12月台湾輔仁大学で開催された

1 中国語の訳は台湾『先秦兩漢學術』第一期に掲載、2004年3月。鄧紅訳。

「第三屆先秦兩漢學術國際研討會」の論文集『百家鳴争—世變中的諸子學術』に収められ、2004年台湾で創刊される國際學報（半年刊）《先秦兩漢學術》第一期にも掲載された。この二つの文章と小論とを対照して読めば、日本の王充研究の全貌は理解されるであろう。

著作・日本語訳類

重澤俊郎 『漢代における批判哲学の成立』大東文化研究所東洋學術論叢第一、大東文化研究所、1957年9月（約22,000字、思想B）

名前は「漢代」だが、専ら王充の批判論を考察したもの。十節に分ける。

「一」では、合理論と経験論は世界解釈に関する二つの対立立場であり、その二つの立場はあくまでも一元的な統一ができないものであるが、批判哲学は両者の調和を図ることができるものと考えて、著者はその批判哲学の代表として王充を発見したという。

「二」では、王充の思想は様々な角度から研究できるが、著者は王充思想の統一的な意識を知識の吟味と合理主義と経験主義との調和にあるとした。

「三」では、当時の学界において王充はどのように評価されていたかについて検討している。後漢の後期では『論衡』を「異書」と見るものが多かったが、それは真の意味を正しく受け取っていないもので、著者は論衡の著作精神を王充自身の話を引用して「疾虚妄」と「真偽の平を立てよう」とした。

「四」では、周代末期から合理主義と経験主義がすでに存在しかつ同一平面上で対立してきたが、王充まではそれらを批判する思想が出現する情勢に至らなかったとした。

「五」では、まず王充の批判哲学の内容を必然と偶然との関係、人間解釈、経験主義と合理主義との関係、歴史観、神秘的諸思想、および伝統的な権威に対する態度などに分類し、そして経験主義と合理主義との関係から王充の孔子および孟子批判を考察した。

「六」では、王充の知識に対する態度を考察した。王充は聖人たちの神的予知能力を否定したが、直接知識と間接知識および両者間の推論関係を検討し肯定していることと、経験的な直接知識を重視すること、および彼の材料と形式に関する認識を考察し、それらも二つの哲学の調和に深い関心があったことを証明するものだという。

「七」では、王充を唯物論者として認めた上で、王充の偶然性と必然性との関係に関する思想を考察した。結論として、王充は偶然性と必然性との調和を図っており、さらに世界解釈は単に経験的認識と合理的な思惟だけでなく、偶然性と必然性との協力も歴史を作り上げられるとして、二つの哲学の調和の一形態を発見したとした。

「八」では、王充の符瑞批判を考察した。王充は経験論から鳳凰や麒麟などの符瑞物を否定したが、同じ経験的な事実から彼が生きている時代に出現した符瑞物の存在を認めた。その上で瑞物の存在根拠を思弁的に考察し「和氣」の生ずるところに帰結した。これも王充の符瑞に対する立場は、経験論と合理論の二柱に支えられていることを示しているという。

「九」では、王充の尚古主義批判と漢代褒頌を考察して、王充のそのような歴史観は、歴史の進歩的必然性、符瑞に対する検討および漢代の善政の確認という三つの基礎の上に成り立っているが、前の二つは合理主義で、三つ目は経験的な事実主義とした。

「十」では、中国思想史に於ける合理主義と経験主義の展開と対立を述べ、王充までは両

者の調和は未解決の状態にあり、王充の批判哲学は時代の必然的要請に応えるものだと、そこに王充思想の哲学の位置づけが見出せるという。

この文章を評価するのは難しい。というのは、著者は最初から「合理論と経験論を調和」という一つの大枠を作って、王充の思想、特に批判論をその中に入れようとした。「削足適履」というか、「先入為主」というか、とにかく、このような枠は、ほかの「唯物論」や「異端思想」や「合理思想」などと同じく、「後世からのフィルター」¹（井ノ口哲也語）に過ぎなかった。当時中国ではもちろんのこと、日本でも王充に対する評価はうなぎのぼりに高まっていた。著者は負けずにそれに参入したが、新しいものを打ち出したいために、経験主義と合理主義との調和という一見独特な評価を打ち出したのである。また、この評価は著者のかねてからの王充を漢代の最大の合理主義者²とする評価と矛盾しているのではないかということを論者は付け加えておきたい。

加藤常賢・重澤俊郎監修、山田勝美・和田利得・市川任三・水上静夫・御手洗勝編『論衡事類索引』油印本、大東文化研究所、1960年10月（B 5版521ページ、約618,000字。思想C、資料B）

この『索引』は、『論衡』30巻85篇を哲学、自然科学、古典解釈、歴史、法刑、経済、社会生活、文芸など八つの分野に分類して、語録の形で各分野の関連資料を集めたものである。このような索引は、康有為の『春秋董氏学』を真似て作られたものと思われる。監修者の一人の重澤俊郎も同じ方法で『春秋董氏伝』（『周漢思想研究』弘文堂昭和18年版）を作ったことがあるからであろう。現在から見れば、このような「索引」の作り方は、古人の著作を無理やりに現代社会科学の分野に分割しただけで、王充の思想を理解するにはあまり役に立たず、むしろ読者の思惟を「索引」の作者たちの見方に誘導してしまう恐れがあると思われる。それもこの「索引」が「油印本」のままで再版されなかった最大の理由であろう。

加藤常賢・重澤俊郎監修、山田勝美・和田利得・市川任三・水上静夫・御手洗勝編『論衡固有名詞索引 附宮内廳書陵部圖書寮藏宋本校勘記』油印本、大東文化研究所、1961年9月（B 5版、『論衡固有名詞索引』は102ページ、『宮内廳書陵部圖書寮藏宋本校勘記資料』はB 5版48ページ、約36,000字、資料A）

前掲の『論衡事類索引』の続編である。『論衡固有名詞索引』は『論衡』に出てくる人名約1,150、地名約330、書名約240、官名約140、年代名30個を「索引」に収めたものである。コンピュータのない時代には大変な労作である。しかも、コンピュータは固有名詞を人名、地名、書名などに分類できないので、この「索引」は今でも存在意義と使用価値があると思われる。

松枝茂夫・今村与志雄編『歴代隨筆集』（平凡社（中国古典文学全集）大瀧一雄訳「逢遇」「物勢」「論死」「自紀」（1959年6月、資料A）

この4篇は日本最初の『論衡』の日本語訳である。

1 前掲の井ノ口哲也氏の文章に見る。

2 「支那古代における合理主義的思惟の展開」（ハーバート、燕京、同志社『東方文化講座第四輯』、1955年）をご参照されたい。

大瀧一雄訳『論衡—漢代の異端思想』東洋文庫46、1965年7月（資料A）

先の4篇に累害・異虚・雷虚・藝増・問孔・超奇・商虫・自然・実知・対作の10篇を加えた計14篇の抄訳本である。

木村郁二郎訳『『論衡』自紀篇』（一）～（四）、（『漢文教室』82・83・84・85、1967年6月・1967年10月・1968年1月・1968年4月、資料B）

漢文を講読するために、訳者が自紀篇の漢文に送り点をつけて翻訳したもの。冒頭部分に王充のこと、その思想、および論衡について短い紹介文を付け加えている。訳者によれば、「自紀篇は『論衡』本文に対して、その立論の目的、王充の経歴を要約している点で、人と思想との関連を考察するのに恰好のもの」という。

大瀧一雄訳『論衡（抄）』中国古代文学大系、平凡社、1972年4月（資料A）

先の14篇から逢遇・累害・藝増・問孔の4篇を削って無形・吉駭・儒増・説日・宣漢・訂鬼・言毒の7篇を加えたものである。

山田勝美譯『論衡』上 新釋漢文大系68、明治書院、1976年9月

『論衡』中 新釋漢文大系69、明治書院、1979年11月

『論衡』下 新釋漢文大系94、明治書院、1984年2月

（三冊計1,880ページ、資料A）

『論衡』の日本語訳の待望の全訳本である。

佐藤匡玄 『論衡の研究』東洋学叢書、創文社、1981年2月版（384ページ、約340,000字、思想A）

日本語による最初の王充研究専門著書で、最も参照しやすいもので、著者が1950年代から発表してきた論文をまとめたもの。日本で出版された最初でしかも唯一の王充研究の専門著書である点は高く評価できるが、その思想史研究の内容にはかなり疑問点があると思われる。

この著作は「前篇」「後篇」「附篇」の三つの部分に分かれている。

「前篇」では、王充の「事蹟」「学問の立場」「思想の背景」「著作態度」「論衡の流伝」「論衡の篇次」「論衡の制作」などの七章にわけて、王充と論衡を簡単に紹介した。その中で注目すべきは、「王充の著作態度」と「論衡の篇次」両篇である。

「著作態度」では、論衡の著作態度について、そのまま王充の「書解篇」「対作篇」と「自紀篇」の話を引用してそれを信じ、経学の否定、「疾虚妄」と真実究明を王充著作の趣旨とした。また、「論衡」を「述」ではなく「作」とした。

「論衡の篇次」では、論衡85篇を性命論、批判論類（一二三）「人間論」「歴史論」および「叙伝」の七つの理論15の類別グループに分けて、それぞれの類別の主な内容を解説した。『論衡』は凡そ幾つかの思想に基づいて書かれており、今本の篇次は論衡の理論体系に合致するという考えのもとで、論衡を幾つかのグループに分けたことは、画期的なことで、初心者には便利な入門解説となるものである。しかし、各類別についての解説は必ずしも正鵠を得ているとはいえない面もある。たとえば、講瑞、指瑞、恢国など明らかに符瑞を講じた篇を「符瑞説批判」のグループに入れ、物勢、奇怪篇など「命」論を講じた篇を「自然主義」

ないし「批判論」に帰結するのがそれである。なお著者は『論衡』は「凡そ幾つかの思想に基づいて書かれたもの」といっていたが、それより、王充が晩年凡そ幾つかの思想に基づいてそれまでに書いた文章をまとめて「編成したもの」と言った方がよいのではないかと論者は付け加えたい。

「後篇・論衡の思想」は「偶然論」「性命論」「自然論」「符瑞論」「大漢論」「鬼神論」計六本の論文で構成されている。

「偶然論」と「性命論」の二篇は、それまで詳しく論じられることのなかった王充の「命」論を「偶然」と「性命」の系統に分けて論じた点が目につくが、しかし、どうしてそのように分ける必要があるのか明らかでない。また、王充の「命」を「天地を貫く必然の理法」（偶然論）とし、「命」論を「人為可能の限界を論じ、超越的命による絶対支配を説く」理論（性命論）としながら、なお王充の「命」論を「超越的な天と鬼神を否定する」と評価するのは理解できない。「天地を貫く必然の理法」、「人為可能の限界を超越」している「命」は、「天」と同じく人間にとって「超越的な」「天命」なのではないか、と論者は思わざるを得ない。

「自然論」は、自然主義、災異説批判、天人分離の三節に分けて王充の自然論を論じている。目的論の世界を斥けて、専ら機械論的立場に於て、宇宙万物の生成変化を説明せんとしたというのを、自然主義の主な内容とする。それに基づいて、王充は災異論を批判し、天人分離の説を確立したという。

「符瑞論」では、王充の符瑞に対する考え方を論じ、王充の二つの符瑞観に注目した。すなわち、王充の符瑞論にはそもそも「批判的合理的」な解釈があったが、後年には一変して、符瑞に肯定的になった。その理由について、この文章では、王充が「漢王朝の謳歌」の根拠のために符瑞に論及したとした。王充の二つの矛盾的な符瑞論に気が付いたのは、この論文の見るべき点である。しかし、王充はほかの王朝の符瑞に対しては「批判的」「否定的」であったが、漢王朝の符瑞に対しては「肯定的」で、それを漢王朝の神聖性の根拠としていた。王充の符瑞論を「批判的」としているが、符瑞そのものに反対しておらず、むしろ大いに漢王朝の符瑞を講じたことを「合理的」といえるのだろうか。論者は理解に苦しむ。その矛盾の原因について看破できないでいるのは、著者には最初から王充は立派な「批判家」で「合理主義者」だという先入観があったからであろう。

王充の「大漢思想」（漢王朝を謳歌）にいち早く注目し、詳しく論じたのは「大漢論」である。しかも、「大漢論」を王充の重要思想として捉え、「論衡の篇次」では「批判論」に分類した「三増九虚」篇も「大漢論」の構成部分に入れて、王充の「大漢論」の文章を「一貫した精神の上に築かれた体系の一連の作」として論じたところは大いに評価できる。しかし、著者は「大漢論」が「一切の世俗的観念を離れ、世俗を自由批判の対象とする彼の立場に照らして考えるとき、一見奇異に属する」とまで述べたが、結局その矛盾を感じながら、「中央礼賛的風潮の反映」の「大漢論」を明らかにした後も、「大漢論」を「真実の追求」と「世俗の尚古主義への批判」として肯定していく。したがってこの論文は結局「一切の世俗的観念を離れ、世俗を自由批判の対象とする」というような王充思想に対する先入観から脱皮できなかったといえよう。

「鬼神論」の「生と死」「鬼神思想批判」「鬼神不存在論」の三つの節では、王充の「人死

ねば鬼に為らず」という無鬼論を詳しく論じ高い評価を与えた。しかし、無鬼から無神まで、短絡的に王充を無鬼神論者とする結論を導きだしているが、無「神」の方に対してはほとんど論証されていない。第四節の「祭祀の意義」では、王充の祭祀に対する態度を明らかにした。

「附篇」は「王充の薄葬論について」「王充における理想的人間像」「王充の孔子批判」「中国思想史における王充の位置」などの四篇からなるが、いずれもエッセイ的な文章である。

とにかく、『論衡の研究』は、初めての日本語の王充研究専門著書として評価できるが、その内容は作者が20年間の歳月にわたって書かれた論文をそのまま一冊の論文集に収めたものであった。上梓のときにもうすこし修正すればよかったのではという気がしないでもない。また、「符瑞論」と「大漢論」以外は、それまでの日本と中国の論衡と王充研究の成果に基づくものが多かったが、その影響を受けすぎてつい自分の特色が打ち出されなかったと思われる。

綿本 誠 『論衡』中国古典新書、明德出版社、1983年3月（資料C）

王充の「命」論に関する諸篇－逢遇・累害・命禄・気寿・幸偶・命義・偶会・初稟の8篇－を訳したもの。しかし、『論衡』で命論を述べた文章はその8篇だけではなく、冒頭の3巻15篇全部それであるのに、なぜこの8篇だけを訳したのか理解できない。

これで『論衡』の日本語訳が出揃った。しかし、『論衡』には難解な文章が少なくない所為か、上記の数点の日本語訳に対する疑問や不満は頗る多かったと言われている。他の日本語訳と比べて訳文のレベルが高いのは大滝一雄の訳であり、大滝による全訳がなかったことを残念に思う人は少なくなかろう。

若松信爾 『論衡のはなしーを見て十を考えるー』明治書院、2001年7月（約90,000字、思想C）

大衆向けに『論衡』を説いた本。『論衡』の現在にも通じる部分をピックアップして解説を施したもの。

論文類（中国哲学史の教科書にある王充関連章節も含む）

1900年

藤田豊八 「王充」『支那文学大綱』巻一二『司馬遷』第七節「班固以後の文学」の「二」、出版社不明。1900年9月（約3,000字、思想C）

管見の及ぶ限りでは、王充を正式に中国文学史の教科書の中で一節を設けて評価した最初の著作である。中国哲学史ではなく文学史の著作であったので、王充の人と事跡を紹介した後は、専ら『論衡』の文章の傾向と「文」に対する態度を論述している。この本の全体を見れば、その時代の中国文学史の体系は未だ整えられていなかったことがよくわかる。

1903年

宇野哲人 「王充」『支那哲学史講話』、大同館、1903年9月（約4,000字、思想A）

宇野哲人 「王充の学」『哲学雑誌』200、1903年10月

宇野哲人 『増訂改版 支那哲学の研究』、1929年11月

宇野哲人 「王充」宇野哲人『儒教史』上、寶文館、1924年7月

以上の四点は、大同館版の『支那哲学史講話』「王充」を中心として、王充の思想を中国哲学史教科書の重要な一環として捉えたもの。

「第一節、王充の事跡と著書」では、王充その人その著書『論衡』を紹介した。

「第二節、本体論」では、「王充が一元気を以て宇宙の本体とし、一元気が分れて天地陰陽の二となり、二氣相交って万物を生ずとして居る」と述べた。

「第三節、性論」では、王充の人間論は各家の説を批判した上で建てられ、研究の方法はきわめて科学的だという。また、彼の一元気論に基づいて、稟気の多少により善悪賢愚を決めるといふ。

「第四節、倫理説」では、王充の倫理説は儒家のものを継承したが、老莊の説も吸収したという。

「第五節、宿命論」では、宿命論は王充の学説の中で最も注目すべきものとし、人生はすべて命に帰結するという。この説では王充の命論を詳しく論じた。

「第六節、迷信を駁す」では、「天人関係」と「鬼神」の二節に分けて、王従がいかに迷信を批判したことを論じた。

「結論」では王充の方法論を論じた。

この七つの方面の論述はきわめて全面的で、またこの教科書は数十回再版されて多くの読者を有したと見られ、日本の近代的王充研究の基礎と既定枠を築いたといっても過言ではない。中国の近代的王充研究は胡適の「王充の論衡」¹によって開かれたことは周知のとおりであるが、宇野の王充評価が日本で果たした役割は、正に胡適の「王充の論衡」と類似しており、胡適は当時北京大学の教授で、東京大学の宇野教授とまったく同じ地位にあったのも偶然ではなかったろう。

1924年

渡邊秀方 「王充」渡邊秀方『支那哲学史概論』、早稲田大学出版部、1924年10月／増補改訂版、同出版部、1930年11月（約5,000字、思想A）

「王充」の一章は「中世哲学」の「第一編」の第九章である。「略伝及著書」「宇宙論」「性論」「倫理説」「運命論」「結論」の六節からなる。前掲の宇野教科書（1903）と類似するものが多い。宇宙論、性論、倫理説の三節は一般的で概論的なものであるのに対して、著者は特に「運命論」に力を入れており、前記の三論とほぼ同じ紙面を使って力説しているのが最大の特徴である。また、「結論」では、『論衡』を漢代宗教史研究の好材料だと評価しているのも、その特徴のひとつである。

1 黄暉著『論衡校釈』付録「四」に所収。1919年著。

1930年

常盤大定 「訓詁時代—王充の『論衡』と漢末の思想」 常盤大定『支那に於ける佛教と儒教道教』、東洋文庫論叢第13、東洋文庫、1930年12月（約8,600字、思想A）

『支那に於ける佛教と儒教道教』という専門著書の「上 宋儒以前の儒佛交渉史」の第一章である。

はじめ書きの部分では、王充の思想を（一）本体観は一気なり、（二）人性観は善惡対立なり、（三）根本原理は自然なり、（四）運命観は宿命説なりと概括した。

また、王充の生涯を簡単に紹介してから、以下の七つの部分に分けて王充の思想を論述している。

「第一 宿命的人生観」では、王充の人生観の基礎をなせる運命説を詳しく述べた。「第二 性説」では、王充の性説は古来の説を批判した上で成り立ち、命説より推して善惡あるが、中人だけに善惡あり、教化できるとした。「第三 本体説」では、王充の本体説を「天地万物悉く一气より成るに由る。一气は王充の本体なり」とした。「第四 道德の本源」では、人は一気を稟けて成り、氣に五行あり、これは五常の起る本源なり、と説いた。「第五 自然無為」では、王充は最後の原理を無為自然に求め、修道の極地を黄老に置いた、とした。「第六 天」では、王充は天觀念を無為自然のものとし、意思、道德律、自然律なしとした。「第七 靈魂不滅」では、王充は鬼神を否定し、同時に靈魂の滅すべきことを主張する、とした。

王充思想を概論した1930年代の著作としては比較的詳しいが、けっこう見方が偏ったところも多い。中国思想史を仏教との関わりの中で考察する専門著作の一部分であったので、王充の思想が仏教の影響を受けたという仮説を立てているが、まったく論拠のない説で、著者の想像の範囲を超えなかったと言えよう。また、王充の氣説を重視するが、それも仏教の説に近いというが、王充の「人死（精神）不為鬼」という無鬼論は仏教の転生説と全然違うものだと言わざるを得ないだろう。

横田庄八 「自由評論家としての王充」、大東文化協会『大東文化』7-8、1930年（約9,000字、思想B）

王充を「儒家式の雑家」と「反動的儒家」と位置づけて、王充は孔子を宗としながら、道德主義を離れない自由評論家と論じたもの。

非常に簡単かつ幼稚な文章で、作者（大東文化大学）学生時代のものと思われる。

1934年

瀧熊之助 「王充の新思想」、瀧熊之助著『支那經学史概説』、大明堂書店、1934年4月（700字、思想C）

第四章「東漢經学の概説」の中の一節、簡単に王充の思想の特徴を紹介しただけ。

1936年

青木正兒 「王充『論衡』の儒学文学協調説」、『岩波講座東洋思潮 支那文学思想』、岩波書

店、1936年／青木正兒『支那文学思想史』、岩波書店、1943年4月（2,000字、思想A）

「上世 実用娯楽時代」の第二章「周漢の文学思想」の第六節として、王充の文学思想を述べたもの。

まず、王充の「文儒」「鴻儒」説を述べたうえで、「文」の価値は「漢の至徳」を賛美することであり、なぜなら国が聖なれば文人があつまるのであり、文人の輩出は国家の瑞徴だという王充の文人価値説を提起した。これは、後の王充の文学思想の精華は「疾虚妄」にあるとする説より正鵠を射ていたといえよう。

佐野袈裟美「王充」『唯物論研究』53、1936年（約3,800字、思想B）

王充を唯物論、無神論、支配階級に反抗する思想の持ち主として取り上げた最初の文章。

「一」では、王充の生涯と論著を紹介した。

「二」では、王充の唯物論、無神論を論じた。王充の思想を唯物論と認定した最大の理由として、天地が気を合して万物が生まれるのだが、王充の言った気は「全く物質的なもの」、ということを挙げている。また、「天」を主宰者としらない点と、気は老子の「道」と異なり、全く無意識的な自然を展開している点もその証拠として取り上げた。王充の無神論については、靈魂が死後に残るという考えを全く否定した、と述べた。

王充を唯物論者としたのは、この文章からはじまったのではないが、単刀直入に気＝物質＝唯物論と結びつけ、王充の思想を唯物論（ないし無神論）者だとはっきり（しかも「全く」を頻発）宣告したのは、日本においては初めてであろう。

1939年

平原北堂 「王充」、『支那思想史』、勅語御下賜記念事業部、1939年（約6,000字、思想C）

氏の『支那思想史』の第一章「秦漢時代」の第九節。六項目に分けて王充思想をまとめた。その内容は宇野教科書の範疇を超えず、独立な見解がなかった。

1942年

守屋美都雄「王充の祖先祭祀観—支那に於ける靈魂死滅思想の展開—」『歴史学研究』95、1942年1月（約20,000字、思想A）

王充の「人死不為鬼」という無鬼論を中国思想史の中に置いて論じたもの。

「一、序言」は、王充の祖先祭祀観を論ずるのに、なぜ靈魂死滅論を探求しなければならないかを説明した。

「二、王充の鬼神及び死靈論」では、王充の無鬼論は、死者無知論から靈魂死滅論を展開し、「およそ天地の間に鬼があるが、人が死んで精神が之となるのではない」という限定的な無鬼であることを明らかにした。

「三、王充の祖先祭祀観」では、王充の鬼神論は、鬼神と死靈とは全く別のもので、死者の靈はその肉体の滅びとともに死滅すると主張し、節葬論を展開したが、祖先祭祀自体には反対していなかった。それは、王充が祭祀を親に対する生前の孝養を義理として親の死後ま

で延長した儀式だと主張しているからで、王充を思想家よりも社会評論家としてみるべきだという。

「四、王充説の意義」では、王充の限定的無鬼論の意義は祭祀行事を否定することにあるのではなく、厚葬という社会風気を除去せんとするところにあるとした。

「五、支那に於ける靈魂死滅思想の展開」では、王充の靈死説の根源を墨子まで追及したが、王充は創始者ではないが、彼の説の意義は、古来のこのような思想を大成し、体系付けかつ展開させたところにあるとした。

「六」は上記の説の「結論」である。

この論文の見どころは、王充の「限定的」(論者の弁) 無鬼論を過大に評価することなく、ほぼ正確に論じたところにある。また、著者は「合理主義」「唯物主義」のレッテルを使っているが、王充式合理主義あるいは「素朴的な唯物論」を「現実的なものを精神的なものに飛躍することがなく」、「目に映ずるもの以外に信ぜず、目に映ずるもののみ尊とする傾向」としたのも、王充思想の本質を把握したものといえよう。

1943年

吉田賢抗 『支那思想史概論』第一篇「第一期の思想」「王充」、明治書院1943年(約1,000字、思想B)

王充の思想を思想史のテキストの中で簡単明瞭に紹介したもの。「一元気を以て宇宙の本体としている」、「彼の学説に於いて最も特徴あるものは宿命論のようである」という見方は、凡そ宇野哲人の『支那哲学史講話』「王充」の既定枠を越えていないが、宿命論は「黄老学派の極端なる宿命観と、儒家の天命観との折衷がある」という観点には、少しの新味が感じられる。

吉田『支那思想史概論』は、日本の明治から1945年まで、中国哲学史に関する「概論的」な著作の最後のものである。それまでの中国哲学史のテキストにおける王充論の最大の特徴といえば、王充を中国哲学史上のあまり重要でない一節として取り上げただけというものであった。これは、その思想内容に対する研究自体がまだ発達していないという状況を反映したものであっただろう。

1944年

田向竹雄 「王充の人と書について(論衡序説)」『大東文化学報』第11輯、1944年3月(約20,300字、思想B)

三つの部分に分けて、王充その人そのことを概論するもの。

「一」では、まず『後漢書』王充伝および『論衡』に基づいて、王充の生涯を簡単に紹介した。次に王充思想の主な傾向を反儒学的意識とし、その理由を、運命論は儒教道德律思想への反逆で、自然思想は儒家目的論への否定であること、あるいは儒家的尚古主義への反対などが取り上げられた。また、王充は儒家以外の諸子に対して高い価値評価をしており、とりわけ道家に対して、高い評価しているだけでなく、道家思想が王充思想の主なもの、たとえば実証的、経験的精神、唯物的態度の根源にもなっているとした。「二」では、論衡作成

の目的について、「虚妄」たるものを批判することにより、その批判精神は歴史を汲んだ中国古代の唯物論の伝統にあるとした。「三」では、王充の著作は『論衡』85篇以外に別にまたあると推測できるが、その思想内容の所為で「儒家的迫害」に出会ったかもしれない、と推定した。

この文章は、論文というよりも中国哲学史の教科書の一節と言った方がよからう。その内容と見方は、戦後から現在までの日本で発行されたいかなる中哲の教科書より簡単明快であり、唯物主義哲学史の要領を得ている、と思われる。よく日本の戦時中にこのようなものの発表がゆるされたなと感心した。

1949年

小野澤精一「王充の偶然論について」『東京支那学会報』2、1949年10月／小野澤精一『中国古代説話の思想史的考察』所収、汲古書院、1982年12月版（約1,800字、思想C）

わずか1,800字前後の短文で、王充の「故」に対する「偶」の思想を概説したもの。著者の東京大学助手時代の学会の発表要旨である。発表の具体的な内容は明らかでないが、その時期の早さ（1949年）に注目したい。

1952年

木村郁二郎「論衡自紀篇について」『竹田博士還暦記念 中国文化研究會論文集』2-4、1952年7月（約5,200字、思想B）

専ら『論衡』の「自紀篇」を論じたもの。

「一」では、『論衡』の思想内容を虚妄の言を正し、真偽の平を立てることにあるとした。「二」では「自紀篇」に基づいて王充の生涯と操行を考察した。「三」では、「自紀篇」が、「俗人」たちの『論衡』に対する批判を再批判したことを考察した。

この文章は結果として「自紀篇」の説を鵜呑みにして、王充の自画自賛をそのまま王充の生涯、操行および『論衡』に対する評価などにしてしまった。また、王充と「俗人」との区別を「真実」に対する両者の考え方が違うことにあるとした。周知のとおり、「自紀篇」は王充が晩年に自分の生涯を振り返って書いた自伝的作品であるので、王充の思想を探究する上で重要な「資料」ではあるが、そのまま無批判に使用して王充の思想を評価してはならない。これは王充研究の一つの大原則にならないといけないと考える。

1953年

木村郁二郎「王充の思想—「故」と「偶」について—」『中国文化研究會會報』（東京教育大学東洋文学第二研究室内）第三期第二誌、1953年10月（ガリ版約14,000字、思想?）

四節にわけて王充思想の中の「故」と「偶」を探求するものである。しかし、この文章はガリ版の所以か、それともいまだ未完成な論文なのか、なかなか読みづらいもので、読んでも意味がわからなかったもので、しばらく存疑し、評価しない。

狩野直喜 「王充」、『中国哲学史』の第二章「東漢の經学」、岩波書店、1953年12月（約7,500字、思想B）

「孔孟に対する彼の批判」「宿命論」「王充の唯物論」「靈魂論」などの四節に分けて王充の思想を述べる。

「孔孟に対する彼の批判」は、王充の孔孟批判を「極めて幼稚」と酷評しながら王充の批判例を解説した。

「宿命論」では、王充の命論を儒家共通の命論の延長線にあると位置付けたうえで命論を解説した。

「王充の唯物論」は、王充の天地生成論の「天地は無意思にして、万物は機械的に生じる」という理論を「天道」に反対する唯物論とした。

また、「幽霊論」では「論死篇」の理論を取り上げて王充の幽霊神霊否定論を述べた。

狩野『中国哲学史』は1953年に出版されたものであるが、概ね1930年代京都大学での講義原稿である。日本で王充思想を「唯物論」と位置付けたのは、かなり早かったと思われる。なお、中国哲学史の入門的テキストとして見ると、王充のほかの重要な思想には触れていないのに、王充の無意味な孔孟批判に対する論述の部分があまりに長すぎるとと思われる。

1954年

福永光司 「王充の思想に就いて—王充と老莊思想—」『東洋史研究』12-6、1954年1月（約18,700字、思想A）

王充の思想と老莊との関連を論ずるもの。

この論文は、老莊思想ないし魏晋思想の特徴を「自然の思想」とし、漢代思想の特徴を「国家権力の奉仕」と「現実の権力者を制御する」と二つにまとめた。そして王充の思想を考察したが、王充思想の最大の特徴を「疾虚妄」の批判論とした。その批判論を根源において支えたものを、「自然篇」の自然思想、鬼神論を批判する精神、運命論における「氣」の自然稟受思想、人の価値に関する世俗の謬論を批判して打ち出した五段階の人間価値論、歴史に関する「時命」の思想と「古今不二」の思想、「三増九虚」篇の古書古伝の「虚妄」に対する批判、などの六方面にわけて論を展開した。最後には、上記の六方面の思想を、「自然」「氣」「時命」の思想であり、「無用の用」であり、「古今斉一」の思想であり、「個我の自覚」であるとして、これらの思想は老莊の思想に近いと結論づけた。

中国で、王充の思想を老莊の道家思想と結び付けたのは、胡適から始まった。このような結び付け方の最大の弱点は、次のようである。すなわち、王充は「雑家」といわれるほどの思想家で、その思想には様々な思想傾向が見られるので、王充を老莊思想と結びつけるのは、そんなに難しいことではあるまい。しかし、このように結びつけるときに、王充の思想の非老莊、非道家的な思想傾向の存在にも注意しなければならなかったのではないかと論者は思う。たとえば、「頌漢」論は儒家の政治論そのものであり、その中の「符瑞奨励論」は、儒家の正統的な天人譴告論の別の側面であるとも言えるし、福永論文が取り上げた漢代思想の特徴である「国家権力への奉仕」そのものではないか。また、狩野直喜の説もそうであるが（『王充の論衡』「その二」）、王充の「命」論あるいは「天命」論は道家思想と正反対のものであろう。こういう意味では、王充の思想を道家的自然主義だという説も、王充研究の一つ

の「フィルター」に過ぎなかったのである。

佐藤匡玄 「王充の大漢思想」『日本中国学会報』5、1954年3月／のちに増補して「大漢論」と改題、佐藤匡玄『論衡の研究』に所収、東洋学叢書、創文社、1981年2月

佐藤匡玄 「論衡の篇次について」『東方学』8、1954年6月／「論衡の篇次」と改題、佐藤匡玄『論衡の研究』、東洋学叢書に所収、創文社、1981年2月

原田正己 「論衡の一考察」『東洋思想研究』5、1954年7月（約44,000字、思想A）

「王充の論衡述作上の二三の方法と態度」「王充の思想傾向及びそれを導いたもの」の二節に分けて、王充の「疾虚妄」の批判論に「どのような方法と態度とが見られるか」、また王充思想の基礎がどんな形で現れているかを究明したものである。後掲の「漢儒の批判的態度について」上（『東洋思想研究』6、1955年12月9日）は、王充の批判態度は、王充独自のものか、それとも漢儒たちと共通点があるかを探究した。全体的に、原田氏の考察は細かく、論衡の各篇の疑点も指摘されているが、それらの矛盾、齟齬あるいは疑点に対する思想的な分析は行なわれていない。結局、これら現存の『論衡』は、王充一人の手で完成されたものではないという結論に至っているのだが、これはあまりにも性急ではないと思われる。

1955年

木村郁二郎「王充に於ける『氣』について」『中国文化研究會會報』4-2、1955年2月（約9,900字、思想A）

「氣」の役割を重視し、「氣」によって王充の批判論、性、命、史観などが如何に展開されたかを詳しく述べたもの。一方では、「彼が否定したかの天人感應論も災異も、「偶」であることによって肯定されることになる。それがまた外ならぬ「命」とされる。しかも、「偶」が「初稟」に於てより強調される時、運命論が生まれる。」「『古今齊一』の思想は、瑞祥論・大漢思想と共に、彼が疎外された漢代のディスポディズムを称揚する矛盾を犯すことになる」、あるいは王充は従来の鬼神論の虚妄を否定したが、鬼神と妖象の必要性和目的も強調されていると木村氏は指摘している。上記の矛盾の構造は、「氣」の觀念が底にあって、主要思想の何れにも中心的な意味を以て浸透し、成立の根底になっている」からできたとされる。また、「氣」の構造的契機の拡大とも述べられた。

王充思想の多様性あるいは多変性は、「氣」の構造的契機の拡大に由来するという解釈は、正鵠を得ている論である。その「構造的契機の拡大」は、論者の拙著『王充新八論』の「王充氣論新議」に詳しく述べられた「氣」万能性、自然性、随意性に相当するものではないかと思われる。しかし、この論文では「氣」とは何かについては一言も触れていないので、文章を読んだ後にいささか遺憾の念を感じざるを得ない。

木村郁二郎「王充の「賢者」論」『中国文化研究會會報』5-1、1955年11月（約7,400字、思想C）

前掲の幾つかの木村の王充研究論文は、いずれも穏やかなものであったが、この文章になると、風格が急変した。唯物主義派の階級闘争理論に基づいて、王充思想の時代の階級性を

追求し始めた。「王充はこれら支配階級の御用教学（儒教の国教化）に反抗し」、「『天』を『故』と考える御用教学の担い手である後漢の支配階級との間に対立を感じ、対立の中で、自分を正しいと考える相手を、正しくないと考え、それを『故』と『偶』との対置によっていいあらわしたのである」。それで王充の階級性を農民の貧困化に同情する「官人群の中における下級官人」と定めた。その定位の中で、王充の賢者論は「自己規定」、「自己提示」、「学問」と操行との関係などをめぐって展開していくという。

したがって、「偶」という哲学上の問題に政治上の階級性をつけるとすれば、「命」あるいは「天命」という概念、あるいは「頌漢」の理論は、どんな階級に属するのであろう、と論者は疑いたい。

原田正己 「漢儒の批判的態度について」上 『東洋思想研究』 6、1955年12月（約45,000字、思想A）

王充の批判論と漢儒との関連を論ずるもの。

前掲の原田論文「論衡の一考察」（『東洋思想研究』 5、1954年7月）に関する拙論を参照されたい。この二篇の論文は、王充の批判論を研究するにあたっては、絶好の参考論文になる。その不足な点は、やはり一つの批判論を評価するときに、単に王充の「疾虚妄」の行為を褒めるだけではなく、その批判の動機、批判の武器等に対しても、もうすこし詳しい分析が必要ではないかと思われることである。

1956年

佐藤匡玄 「王充について」愛知学芸大学『研究報告』 5、1956年1月

佐藤匡玄 「王充の偶然論」廣島哲学會『哲学』 6、1956年3月／「偶然論」と改題、佐藤匡玄『論衡の研究』東洋学叢書、創文社に所収、1981年2月

木村郁二郎「王充における「大漢」主義の問題」『大倉山学院紀要』 2、1956年11月（約11,000字、思想A）

王充の大漢主義、つまり漢王朝賞賛の主張を論じたもの。

「一、視点の設定」では、王充の最も精彩を放つ思想といわれる感応論批判と、最もマイナスの面といわれる大漢主義との関連に対する探求を文章の主眼とした。

「二」は王充の感応論批判を考察した。

「三」では、王充の賢者論を述べた。

「四、大漢主義の主張」では、王充の漢王朝賞賛論に二つの側面があるとした。一つは、「賢者論による理想的官人としての立場よりする、世俗—官人の漢王朝観の批判を通じて描き出す要請的な漢王朝の幻想形態を説く消極的な面」と、もう一つは「感応論との関連の中で、瑞祥の存在によって漢王朝の偉大性を立証する積極的な面」である。

結論として、王充の大漢主義における、感応論反対から「感応」を根底におく瑞祥論への転換には、賢者論による自己評価が存在する、つまり、俗人としての官人と戦い、理想的な官人としての自己を確立しようとしたために、専制君主の批判よりも、その神秘性と権威を擁護し、君主の聖徳に感泣する人間になった、とした。

大漢主義に対する評価は正鵠を得ているが、この文章を読んで思い至ったのは、大漢主義が王充の思想全体においてどのような位置を占めているかが、王充評価の分水嶺の一つになり得る、ということである。つまり、大漢主義を王充思想の中の副次的なものとする人にとっては、大漢主義はあくまでも王充思想のマイナス部分、あるいは「局限性」あるいは欠点といえるが、大漢主義を王充思想の中での主要なものとする人にとっては、欠点とかマイナス部分とかでは片付けられないものであろう。

1959年

御手洗勝 「王充の人間観について―「作者」としての意識―」『史学研究』71、1959年1月
(約20,000字、思想A)

七節に分けて、文人としての王充の「人間観」、つまり王充の人生観を探究したもの。

「一」では、王充の生涯と時代について述べ、王充の落魄した人生と、彼が生きていた聖世とを比べ、王充がいかに自己意識と自他意識をしつつ著作生活を送ったかというテーマを提起した。

「二」では、王充の考えている社会的・人間的関係は、自然的な気を含めて、全く「命」（あるいは偶然性）のはたらきに委ねられており、「命」は人間の社会的・経済的な地位を決定する、ということを示した。

「三」では、王充の性説の独創性は、人が稟受した五行の気に基づく点と、中人には性の可変性があるという点にあることを示した。

「四」では、王充の理想的な人間像を述べ、王充は儒生と文吏を比較する中で、儒生・通人・文人・鴻儒という四つの階層を樹立したことを示した。

「五」では、王充の前記のような人間観はその師といわれる班彪の学風と関連するだろうとした。

「六」では、王充は創作の価値を認識しその実践をもって、聖人と自認していたことを明らかにし、その源は司馬遷にあるとした。

「七」では、王充がいかに自分の創作活動と『論衡』を高く評価していたかを明らかにした。

「八」は結論で、王充は天子を頂点とする現実社会のほかに、作者＝聖人を頂点とする精神的な階級社会を独自に構築し、自分を作者の地位に昇らせ、思想批判と強化を図った。このような人間観を貴族主義的、個人主義的と規定して、一種の社会反抗としたのである。

この論文は御手洗の王充論シリーズの第一弾である。御手洗王充論の特徴は、50年代の王充賛美の風潮の影響を受けず独自かつ冷静に王充思想の真相を追究するところにある。

森三樹三郎「王充の運命論のもつ歴史的意味―徳と福の問題―」『創立十周年記念論叢』、大阪大学文学部、1959年3月（約15,000字、思想B）

道徳と幸福との関係を中心に、王充の運命観を探究するもの。

著者はまずドイツ哲学者カントの説に従い、人間社会の道徳と個人の幸福は根本的に性質の異なったもの、矛盾するものだと設定し、中国人の人生観の基底にふれるものとして、様々な思想家は道徳と幸福の内容および相互関係について自分の見解を提出しており、王充

の運命観もその見解の一つであるとした。著者はその設定のもとで、王充の運命観の内容、とくに三命（正、随、遭）を中心に探求し、ほかの説との関連および王充の思想の持つ歴史的意味を述べた。結論として、王充は漢代の三命説、神仙説、天人相関説を批判しながら自分の見解を提出したが、その見解は儒家思想の純粹化につながったとした。また、その歴史的意味として、王充の運命観は儒教から仏教へという六朝の時代において、仏教の説に反対する理論の先駆的なものになったという。

この論文は節を分けない一つの長文になっているが、構造的には三部分に分けられる。第一部分は簡単にだが王充を紹介して王充およびその思想を高く評価している。第二部分は王充の運命観を論じている。第三部分は王充の運命観の持つ歴史的意味、とくに六朝への影響を述べている。第一部分の王充に対する高い評価は、凡そ当時中国からの影響を受け、先入観をもたられされたものと見られる。第二部分の王充運命観に対する論述は基本的に穏当に進められているが、王充の運命観は「儒家思想の純粹化」につながったという結論はやや性急ではないかと論者は考える。

大谷邦彦 「論衡における鬼神」『漢文学研究』7、1959年3月（手書きガリ版刷り、約14,000字、思想B）

一般的に鬼と神は発音も違い、字形も異なる。この点に着眼し、論衡に出てくる鬼、神、鬼神という三つの概念を持つ意味を考え、王充の鬼神論を考察したもの。

「二、鬼について」では、王充が述べた鬼の形態について考察した。王充の「鬼」概念には、気からなるもの、「人」と異ならない「物」、死者の霊を指すものなどがあるとし、また鬼のさまざまな形態について述べた。王充は鬼が死者の霊からなるという説を否定しており、著者はその理由の一つとして「人死無知」を考察した。さらに、王充の鬼と妖祥に近いという考えを明らかにした。

「三、神について」では、王充は「神」の形態についてさまざまな考えを持っていることを明らかにした。たとえば、超人的存在、靈妙な力を持つ存在、天地の神妙なる「気」などがそれだとした。また、「神」には形容詞的な用法があり、ほかのものについて価値的な意味をもち、また人に害を加えない特徴もあるとした。

「四、鬼神について」では、まず、鬼神は天地陰陽と対応して使われることに注目した。また、鬼と神との区別もあまり語られていなければ、同じ概念で語られた場合も少ないとした。

一見乱雑な文章であったが、これは文章が乱雑なのではなく、王充の鬼神の概念は、「人死不為鬼」以外は、ほとんど中国の当時の鬼神概念と同じく、一定しておらず、さまざまな場合に使われていることを反映したもので、その不一致性を述べている結果だと思われる。

1960年

田村専之助「王充の氣象観—中国—世紀代の唯物論者—」『史観』57・58、1960年3月（約11,000字、思想B）

王充氣象観を探求する前に、まず王充の自然観と論理を述べる。王充の自然観について、「他の意思から独立した自分自身の必然の働きで現象するが自然だ」、つまり「みづから」、「おのずから」、がこれだとした。また、王充は天地が自然的に万物を生ずるという思想を唯

物論的、弁証法的に一步前進させた、それはすなわち天地の気の働きがおのずから万物を生むので、その気は陰陽の気というような形而上的な気ではなく、唯物論的な気だと規定した。

王充の「論理」について、その注目すべきところは、陰陽思想の本来の唯物論的、弁証法的な姿を理解し適用した点にあるとした。「気象観」の一節は、概論、各論—気温、降雨、雲、雷、雪、風などに分けて、王充が様々な気象現象に対して如何に解釈しているかについて述べたものである。

王充の気象観を探究した専門論文は、この論文が初めてではないと思われる。しかし、王充のこれらの気象現象に対する解釈はほとんど「氣為之」としていたのは周知の通りである。これについてはこの論文の「概論」でも論じられていた。それを唯物論や弁証法と結びつけるのが当時では流行っていたようであるが、果たして王充の言った「氣」は唯物論とイコールであろうか。果たして何であろうと「氣為之」とする解釈法が弁証法だといえるだろうか。これらは当時から王充を唯物論者科学精神の体现者と判定する上での最大の難関であったが、この論文もその難関を乗り越えることはできなかったと思われる。

御手洗勝 「王充の王朝観」『広島大学文学部紀要』17、1960年3月（約19,000字、思想A）

王充の王朝観、つまり歴史観を考察するもの。

「1」では王充の師といわれる班彪の「王命論」を考察し、王充の王朝論はその王命論と一致する点が多いという。

「2」では、まず五行説から王充の王朝論を考察し、王充の王朝論は五行相剋の説を採用しており、その目的は現実の漢王朝の絶対性と優秀性を説明することにあるとした。次に王充の王朝論は彼の「命」論、とりわけ偶然・必然論と絡んで展開されていることを考察した。

「3」では、王充の王朝論は班超のように瑞祥論を講じ、漢王朝の絶対性を証明するために展開されていることを指摘し、その瑞祥論について詳しく論じた。

「4」では、王充の王朝論は讖書の説を肯定し、その神秘的性格を命の理論によって解釈しなおしたもので、その解釈によって漢王朝の絶対性は不動のものになったことを指摘した。

「5」では、王充は尚古思想を批判しているが、当代の儒家の史学思想、とくに春秋公羊学の思想をもっておらず、時には公羊学を批判していると述べた。

「6」では、王充の古代と現代社会に対する認識を述べ、王充の歴史観のキーポイントは各方面の比較を通じて古代の優越性を消極的に否定して、現代を積極的に肯定することにあると述べた。

「7」では、王充の王朝観を、命の思想、賛うべき漢王朝の絶対性、その畏敬すべき神的証拠（瑞祥）と、歴史は漢代までで停止するという進化論とまとめ、論衡と王充の思想には未来社会への期待と社会改造の意欲がほとんどないという結論に至ったのである。

王充の歴史観王朝観の真相、つまり、尚古思想への批判と当局への擁護、国命論瑞祥と緯書説をもって漢王朝の神聖性と絶対性を肯定しようとしたことを知るためには、この論文を読むことを論者は薦めたい。それを通じて王充思想の「合理的」「科学的」ならざる真相が明らかになるであろう。

1961年

木村英一 「論衡」東京大学中国文学研究室編『倉石博士還暦記念 中国の名著—その鑑賞と批評—』、勁草書房、1961年10月（約5,000字、思想B）

王充の『論衡』を中国の名著の一つとして紹介する短文であるが、著者はおもしろい口調で王充の人物像と『論衡』の見どころを紹介している。論衡がいかに面白いかというように、偏ったところはなく、唯物論とか立派な批判家だというような誘導もしていない。予備知識のない人、とくに学生を指導するときに、名著というものを紹介する場合には、正にこのような態度を取るべきではないかと思わせるほどである。

御手洗勝 「王充の鬼神論」『支那学研究』（広島支那学会）第26号、1961年10月（約15,000字、思想A）

この論文は、まず、王充の鬼神論を二つの角度から検討している。一つは、王充は鬼神の客観的实在性を否認するが、それを一定の心理現象の触発による感官現象として認めること。もう一つは、鬼神を「命気のはたらき」として、客観的实在物と認めること。両者は互いに矛盾する理論であるが、ともに伝統的な鬼神の存在を否認していた。一方、王充は伝統的な鬼神を否認するが、鬼神を祭る祭祀の儀式的存在意義を説いていた。

中国では王充が立派な唯物論者で徹底的な無鬼神論者だと騒いでいたとき、その影響を受けずに、冷徹に独自の研究を行なった論文である。この論文と前掲の守屋美都雄「王充の祖先祭祀観—支那に於ける靈魂死滅思想の展開—」（『歴史学研究』95、1942年1月）と合わせて読めば、王充の鬼神論の真相が大体わかるだろう。

また、この文章は王充の「気自然」思想に注目し、「気のはたらき」は人為・人智と別の次元で王充の思想の土台になっているというのも面白い観点である。残念ながら、論者はそれに対して深い議論をしていない。

1962年

戸川芳郎 「王充命定論試探」『中国の文化と社会』9、1962年6月／後『漢代の学術と文化』（研文出版2002年版）に収める（約30,000字、思想A）

王充の命論を本格的に探究した初めての論文。というのは、それまでの「唯物主義派」の王充研究は、王充の命論を唯物論、あるいは「反体制的な思想の体系の中の大きな弱点」（戸川の語）とするばかりで、それに対する研究があまり行われてこなかった。

この論文は、まず王充の命論を人性論と命定論に分けて考察しながら、王充の哲学体系との関連も論じている。論文は札記の形で論を展開する。

「二、人性論」では、王充の人性論および命論との関係を次のような綴りにまとめている。1、「性」は可変的である。2、「性」には善悪がある。3、「性」論と教育観は大いに関連する。4、「性」と人格の形成に大きく影響する。5、「性」の善悪は「気」の厚薄に原因する。6、「気」は物質的世界の普遍的な基礎である。

「三、寿命説」では、命論を王充の人性論・社会観と絡めて探究した。1、「寿命」は「気」の厚薄により決定する。2、「寿命」は形体（肉体）に規制される。3、人間は正気を

稟受する。4、「寿命」に正数を設ける。5、「命」と「性」の関係は稟受の仕方によって決まる。

「四、命定論」では、「命」の人生に対する決定的な役割を論じた。1、稟氣に根源する「命」に「禄命」を加えた。2、「性」「行」と「禄命」との関係は不一致である。3、「禄命」は先天的である。4、「禄命」の決定の仕方自然である。5、王充の社会観は「命」論である。6、儒者の「随命」は否定される。7、偶然論と社会観は矛盾する。8、「命」論は偶然論と調和されている。9、「国命」は「人命」を越えて社会現象を支配する。10、「偶適自然」は偶然的自然性と盲目的必然性であり、社会現象もそれに従う。11、命定論は彼の仕官生活に大きく影響する。

「五、命驗論」では、命をはかる理論と方法を論じた。1、命は認知できる。2、命驗は「命」論の補足説明にすぎない。3、禄命の効驗は骨相、符瑞などで経験的に発現できる。

以上の研究札記からみれば、戸川氏の王充の命論に対する探究は、個人の「運命」論にとどまらず、王充の人性論、教育観、社会観ないし国家観に及んでおり、王充研究の新しい道を開いた、といえる。

1963年

小野澤精一「王充」東京大学中国哲学研究室編『宇野哲人博士米寿記念論集 中国の思想家』上、勁草書房、1963年5月（約7,000字、思想B）

中国哲学研究の入門書において王充その人とその思想を簡単に紹介したもの。

「一 王充の伝記」では、王充の生涯を紹介した。「二 論衡の内容」では、論衡の内容と歴史上の地位を紹介した。「三 王充の偶然論、運命論と気の哲学」では、王充の哲学の中心と見られるこの三論について紹介した。偶然論と運命論を分けたのは、おそらく佐藤匡玄の『論衡の研究』の影響を受けた説であろう。なお、氣論については簡単に触れた程度である。「四 王充の天人感應思想批判と漢王室の賛美」では、批判論と頌漢論を紹介した。

著者は王充が天人感應論を批判しながら、富貴の命は星の気によるもので、命は骨相に現れ、貴命を受ける場合は吉驗が現われるという説を主張することに矛盾を感じた。しかし、その矛盾に対して、王充が反対したのは天を媒介とする人間の操行に対する応報であり、天から与えられた運命はそのまま認めていると著者は弁解している。また、王充の漢王室の賛美についても弁解ばかり述べている。

伊藤 計 「アポーリン・アレキサンドロヴィチ・ペトロフ著『王充—中国古代の唯物論者と啓蒙思想家』李時譯の紹介と論評」『中国の文化と社会』10、1963年11月（40,000字、関連C）

ペトロフの著作を、それにほぼ全面的に賛成する立場から紹介し論評したものである。これを読むよりペトロフの原作を読んだほうがよいと思われる。

清水 栄 「中国における『論衡』研究について—その構成に関する研究を中心として—」『漢文教室』66、1963年3月（約14,000字、資料A）

1950、60年代中国で発表された王充研究の論著の中から、『論衡』の構成についての論述

をピックアップして検討したもの。

1964年

重澤俊郎 「漢代以後の唯物主義世界観・王充」重澤俊郎『中国哲学史研究—唯心主義と唯物主義の抗争史—』「第二部 唯物主義世界観の諸問題」、学術選書、法律文化社、1964年9月（全部約280,000字、王充に関する部分は約28ページ、23,000字、思想B）

この著作は、その名前から見て、「哲学史は唯心主義と唯物主義との闘争史である」というスターリン哲学に基づき、中国哲学者の思想から関連部分を調べ、それぞれの陣営に配属してその理由を述べるものであった。王充に関する部分では、批判論、運命論、世界観および頌漢論を取り上げて、王充思想をなぜ唯物論に入れたかを論じている。しかしこれらの論の展開は、いまから見ればいささか無理な一面があるのは否めない。

まず、批判論では、著者は大いに王充の孔孟批判および聖賢批判を取り上げて、それを王充唯物論者説の理由とした。問題は、まずその当時、孔孟はそれほど神聖化されており、批判することも許されなかったのか。そして、王充の批判の項目は正しかったのか。それについては、著者も全く自信がなかった。問孔の18項、刺孟の9項の中で、王充の批判が正しかったのは刺孟の一項目のみと著者も認めていた。思うに、聖賢批判は大いに結構なことであったが、批判項目がほとんど正しくないとなると、その批判自体も疑われるはずである。

第二節では王充の運命論と必然偶然論を検討した。著者は命論が王充哲学に占める比重が大きく、そのため唯物論への道から遠ざかっていると認めながら、彼自身の階級的制約に帰結し、それを王充思想の欠点としたのである。

第三節では論者は王充の「斉世篇」などにある「古今同一」の歴史観を述べて、それを素朴な唯物論的要素とした。それは一見一理あると思われるが、論者は王充がその歴史観を打ち出した「頌漢」の目的について一言も触れていない。

第四節の前半部分は、王充の天人譴告説に対する批判を取り上げている。後半部分では王充が符瑞に対して示した関心を述べた。その二つを一つの部分にしたのは、著者がそれらは同じ問題の違う方面であることを意識したからかもしれないが、その関連性と重要性は無視されている。災異論は不徳の君主を譴告する理論であり、符瑞論は明主聖王を奨励する理論であった。王充は災異譴告論には反対したといえるが、その目的は何かといえば、漢代の明主聖君には必要がないと言いたかったのである。それを明らかにせずに、譴告論は唯物論であり符瑞論にも物質的根拠があるかもしれないというのは、如何なものか。

第五節は、前半部分では王充の頌漢論の内容と目的を検討して、またそれを王充の階級制約性に帰結している。最後に、著者は王充の思想には実に唯心主義的な内容が多かったのに、なお王充を唯物主義世界観の発展史に載せた理由を説明している。

思うに、同時期の中国の王充研究の論著と比べて、この論著が王充思想の中の「命」論、符瑞論、頌漢論など、いわゆる「欠点」たる唯心論部分を直視して重視し、それを詳しく検討していることは、大いに評価できる。しかし、そのような重要な思想が明らかに「唯心主義」であるにもかかわらず、最初から唯物論という枠があるので、王充を無理矢理にその中に入れようとする著者の努力は、なんと無駄なことかと思わざるを得ない。

狩野直喜 「王充の論衡、その一」、「王充の論衡、その二」、「王充の論衡、その三」、「王充の論衡、その四」、狩野直喜『兩漢學術考』『兩漢文學考』、筑摩書房、1964年11月（以上四篇約15,000字、思想A）

この四篇は、著者が大正14年（1925年）京都大学で行なった講義の原稿である。

「その一」では、王充その人とその生涯をほぼ公正に史実に基づいて紹介している。王充の「不遇」の生涯を紹介した後、運命論を王充思想の中心として、宋代の黄震の王充に対する「惜其初心発於怨憤、持論失於過激」という評価を「至論」とした。

「その二」では、王充の「命」論を紹介した上で、その「命」論が儒家とも道家とも無関係だとした。

「その三」では、王充の「命」を自然法とか物質界の因果律のようなものとして捉え、そのような反主宰的目的論は、自然であり、唯物論だという結論を出した。

「その四」では、王充の鬼神論は唯物論の立場から、鬼神有無と靈魂不滅説を論じ、鬼神論と靈魂論を「氣」の方面より論じ、漢儒と異なる説を打ち出したという。さらに王充の批判論にも触れた。

もしこの論著が本当に1925年の原稿であれば、王充の哲学を「唯物論」として捉えたのは、日本ではこれが初めてであろう。その唯物論的評価の系譜は、後に小島祐馬—重澤俊郎に継承されて、京都学派の王充研究の基調となっていく。

1965年

岩田有史 「王充の天」『集刊東洋学』（東北大学中国文史研究会）14、1965年10月（約9,000字、思想B）

王充の「天」と「命」との関係を探求した論文。

「天」の一節では、談天・説日・物勢・自然の四篇を中心に王充の「天」を検討し、「天」の特徴を「自然無為」とした。

「人の命」と「国家の命」の両節では、人の運命に関する「命」と「国命」論を検討した。結論として、「命は自然無為の天を背後にして、人格天を背後にもつ世俗の価値観に対抗した」というのである。

王充の言った「天」とは自然無為であるというのは、当時の王充評価の主流観点であったが、「命」は「自然無為の天を背後に」するという観点が新しかった。しかし、それに対する論証がなかった。

大久保隆郎「王充の薄葬論について」『人文論究』26、1965年12月

1966年

大久保隆郎「王充の典籍批判について」『漢文学会会報』25、1966年6月

戸川芳郎 「王充人格論弁説」『東京支那学報』25、1966年6月／後『漢代の学術と文化』（研文出版2002年版）に収める（約22,000字、思想A）

「王充命定論試探」を補足して、王充の人性論の中の「人格」論を検討したもの。

「一、はしがき」では、王充の人性論では、人の自然的特質と社会的道德性的品性が混同されているが、後天的可変性があると指摘し、王充の人性論には完成されるべき人格の目標が制定されていると述べた。

「二、儒生と文吏」では、儒生と文吏との区別を論じ、文吏は事務的处理には優れているものの、人格、学問においては儒生に及ばないことを論じた。

「三、知識と人格」では、可変的な「性」は先天的な稟受の仕方によって形成され、後天的教育によって完成点に達することを論じた上で、文吏と儒生は学識において共通性がないことや、仕官生活と人格との関係などを論じた。

「四、儒生・文儒・通儒」では、儒生を「儒生」「文儒」「通儒」などの三等に分けて、それぞれの基準を述べた。

「五、文人・鴻儒一斑」では、最高級の儒生を「鴻儒」と定め、その基準を「造論著説」としたことを論じた。

この論文は性命論の角度から、王充の人格論、特に知識の差異で人格の差異を論ずる王充の独特な「儒生の人格論」を細かく論じて、王充の人性論の重要な一側面を明らかにしたものである。

内山俊彦 「漢代思想における異端的なるもの」一『山口大学文学會誌』16-1、1965年7月

内山俊彦 「漢代思想における異端的なるもの」二『山口大学文学會誌』17-1、1966年7月
(約14,000字、思想B)

内山俊彦 「漢代思想における異端的なるもの」三『山口大学文学會誌』17-2、1966年12月

「漢代思想における異端的なるもの」「二」の副題は「王充と読書人的異端の系譜」となっており、専ら王充の異端思想を論述するものである。「漢代思想における異端的なるもの」の「一」において、論者は、中国思想のありかたに「二つの基本的様態」を設定した。一つは、権力と結合し、それに対する擁護・奉仕の立場を志向する様態で、それを「正統的思想」と呼び、他の一つは、それに対する批判・反抗の立場を志向するか、ないしは、逃避を志向する様態で、それを異端的思想と呼ぶ、としたのである。そのような二分論の下で、論者は漢代の思想を検討し、淮南子、王充、後漢末の農民思想（太平道・五斗米道）を漢代の代表的な異端として取り上げ、これらの思想内容を検討した。

「一」は淮南子、「二」は王充、「三」は後漢末の農民思想を論ずるものである。

「二」の「王充と読書人的異端の系譜」は、王充が「正統的な思考様式に対する批判」をどういう形式で行ったかを考察している。論者が取り上げたのは、王充の「天」論である。それによれば、王充の天論は「天地」を自然なものとしており、また自然なる天地の本質は「気」であるとする。このような「天」論は漢代儒教の神秘的性格の根底をなす天人相関説的思考様式に対する批判であるという。また、王充の「自然」論は、世界の合理主義的解釈であり、「天」が万物の生成者、支配者とする「天人相関説」およびその人の行為に対する反応、つまり符瑞や災異への批判でもあるという。

一方では、論者は、王充の運命論を「気」と連動している「自然」の一環と見なし、正統思想の礼教国家的偽善性への批判を生み出したものだとする。

また、王充の大漢論（あるいは頌漢論）を、正統思想を否定しそれに替わる新しい思想を

措定できなかった「弱点」としたのである。その大漢論から王充の階級の性格を見出し、地主階級の中の「中小地主」階層に属する理由としたのである。

この論文は、大凡当時の王充研究成果に基づくものばかりであり、王充を「異端的思想家」と帰結するのも内山氏から始まったものではなかった。この論文の新しいものを、敢えていえば、中国の思想史を「正統的」と「異端的」に二分し、思想家たちをその二つの新しい陣営に分類したということである。しかし、当時では、「唯物論」と「唯心論」、「合理的」と「非合理的」、「無神論」と「有神論」、「徳」と「福」（森三樹三郎）など、幾つかの二分論的「フィルター」が中国思想研究の学界で流行っていた。このような方法は、私見から見れば、いずれも中国の伝統的「陰陽的」二分思考法に属するものである。内山氏の「正統的」と「異端的」の理論は、氏が後ほど提出した「歴史的」と「非歴史的」理論（本文の「内山俊彦「王充の歴史意識について」『中国思想史研究』19、1996年12月」に対する評語を参照されたい）と同じく、そのような「陰陽的思惟法」から発展した二分論に加担したに過ぎなかった。

佐藤匡玄 「論衡における理想的人間像」『日本中国学会報』18、1966年10月／「王充における理想的人間像」と改題、佐藤匡玄『論衡の研究』、東洋学叢書所収、創文社、1981年2月

1967年

大久保隆郎「王充の初期思想初探—讖俗節義の考察—」『漢文学会会報』26、1967年10月

1968年

戸川芳郎 「四庫全書總目提要「論衡」譯注並びに補説」『お茶の水女子大学人文科学紀要』21-3、1968年3月／後『漢代の学術と文化』（研文出版2002年版）に収める（約30,000字、資料A）

前半部分は「四庫全書總目提要「論衡」」を日本語に訳し詳しい注をつけたもの。

後半部分の「補説」は、まず、「一、解題」では、『論衡』について紹介しているが、論者のそれまでの王充観にやや反して、『論衡』および王充の思想に惜しめない賛美の辞を捧げている。「三、王充関係研究文献類目」では、127点の王充研究論著をリストアップして紹介した。それは冒頭にも言及したように、1967年までの主なものを集めたもので、後に滝野邦雄が「王充研究論考目録（1968—1982年）」（『中国研究集刊』地号、1985年6月）を著し、井ノ口哲也が「王充研究関係論著目録—1983年—1996年」（『中国研究集刊』往号1996年）を著し、最後に井ノ口哲也がその三点をまとめて修正した「王充・『論衡』関係研究論著目録」ができて、学界の関係学者に大きな便宜を与えた。

小島祐馬 「王充その他の後漢時代の思想家」小島祐馬『中国思想史』第三章、創文社、1968年10月（約7,500字、思想B）

小島氏が1930、40年代京都大学で行なった講義の原稿を、60年代に弟子たちが整理して出

版したものである。唯物論の系譜とその内容は、狩野直喜の「漢代の文学」を継承したものが多く。

1969年

戸川芳郎 「東漢初期にあらわれた政治思想の一形態—王充歴史観剖析—」『中国古代史研究』3、1969年11月／後『漢代の学術と文化』（研文出版2002年版）に収める（37,000字、思想A）

八節に分けて、王充の政治と歴史思想を論じた長い文章である。

（一）では、王充の他の思想を概ね論じている。

（二）では、王充の生涯に深く関わった二人の人物謝夷吾と第五倫が王充に与えた影響を推測を交えながら論じた。

（三）では本論に入り、まず王充が「いかなる状態を和平と見なしたか」について、人民の社会生活が安定し、快樂の生活を過ごすことが「太平」であり、そのときには「符瑞」は必要でない、とした。「現王朝の治世を和平と認めるか」について、王充は生涯「永平の治」に遭って、世の中は平和状態にあると考え、幾つかの災害が発生してもそれは「無妄の変」つまり政治と関係のない自然災害で、また、当時は「政治の災」がない、つまり国家の為政者が優秀な政治を行ったからだとしたのである。

（四）では、王充の現状認識は、「和平」という現実主義的な視点を根幹として、まず、王充が「当時の尚古主義をいかに観たか」を論じた。王充はまず、「天不変易、氣不改更」という自然の気論をもって上世（古代）と下世（現在）は「古今不異」と述べ、それを尚古主義批判の根拠の一つとした。また、彼の人性論をもって、今の人を知れば古代の人をも知る」という稟気の均一性に依拠し、古今は同一の人間が治世しているので、必ず古代が優れていたとはいえない、とした。

（五）では、王充の現実認識は、世俗の「符瑞説」とは根拠が異なっていた、とした。では、王充はどのように「符瑞」を認識していたか。王充はまず、「符瑞」現象を最も調和した自然現象「和氣」からなるものと考えた。そして、その和氣は、自然と政治が安寧であるときにやってきて「符瑞」になる、とした。

（六）では、王充が述べた自然の「気」と物類の関係を論じた。王充は自然現象の観察により、「符瑞」をはじめ、妖祥などについて解説を行った、あるいはそれを試みた、とした。また、現実の社会を「和平」の治世と認識していた王充は、これらの符瑞を和平の証拠とした、というのである。

（七）では、王充の頌漢思想と大漢主義を探究した。基本的に、王充は現実の治世を「皇徳和平」とする前提の下に、瑞符の発生を様々な角度から論じている、とした。また、この頌漢思想は、「現実の要請」であったとする。

（八）では、王充の命定論と政治との関連を、符瑞、人間社会、治乱などの方面から述べた。

全体の結論として、王充の政治思想の本質を現実の「劉漢政権の歴史優越性を証明する」ものとして、その目的を達成するために、彼の自然思想、知識論ないし命定論を応用したが、被支配者側に立つ意識はなかった、とした。

長い論文で、様々な角度から王充の政治論と歴史観が探究されているが、各節の間の論理的関連が欠ける点も否めないと思われる。これは戸川氏の「札記」的な作文法に共通したもののといえよう。

1971年

森三樹三郎「論衡」森三樹三郎『上古より漢代に至る性命観の展開—人性論と運命論の歴史—』、東洋学叢書、創文社、1971年1月（約42,000字、思想A）

書名のとおり、王充の性命論を人性論と運命論の歴史の中において、その思想内容と歴史的位置を説くもの。

長い文章で章節を分けていないが、まず、王充の性命論の歴史的位置付けを「上古より漢代までに至る性命論の総決算として見られるばかりでなく、次に来たるべき六朝の性命論にも重大な影響を及ぼしている」とした。次に、王充の性命論の基礎とみられる天道観から考察を始めている。王充の命論の基礎を天道自然無為とし、それがそもそも道家の思想だと明言した。また、王充の性説は、周人世碩の説、孟子の性善説、告子の説、荀子の説、陸賈の説、董仲舒の説、劉向の説を取り上げた上で、世碩、公孫尼子などの説に賛成しながら、自分の説を展開していく。そして、王充の命論は性論と共に「その淵源を天にもち、同一物の両面」でありながら、相反する性格を持つと捉えて、王充の性命論を全面的に論述していく。最後に、王充の性命論が、王充の全体としての思想的立場をどのように規定していくかについて論じ、王充の思想的な立場は、儒家に反対し（あるいは漢代儒家思想の歪みを正し）、道家に近いという結論に至っている。

王充の性命論を人性論と運命論の歴史の中で捉え、性と命との関係を詳しく探究したのは、この論著の優れたところではある。同じく王充の「命論」を詳しく論述しながら、命論を道家思想に結びつけていない戸川芳郎氏の「王充命定論試探」（『中国の文化と社会』9、1962年6月）と対照しながら読めば、王充の性命論の正体が分かってくると考える。

大久保隆郎「論衡」答佞篇について』『福島大学教育学部論集』23-2、1971年1b1月

佐藤匡玄 「王充の薄葬論について」『愛知学院大学文学部紀要』1、1971年12月／佐藤匡玄『論衡の研究』、東洋学叢書所収、創文社、1981年2月

1972年

小野澤精一「『論衡』—漢代の異端的思想」『東京大学新聞』912、1972年4月10日／小野澤精一『中国古代説話の思想史的考察』所収、汲古書院1982年12月（約2,000字、思想C）『論衡』という書物と王充の思想を簡単明瞭に一般向けに紹介したもの。

戸川芳郎 「文儒ということ」『青木正児全集』三附録「月報」8、春秋社、1972年9月（約3,500字、思想C）

王充の文人と儒生に対する見方を随筆的な形で紹介したもの。

宮崎市定 「論衡正説篇説論語章稽疑」『東方学会創立25周年記念東方学論集』、東方学会、1972年12月／『宮崎市定全集』3、岩波書店、1991年12月（約14,000字、資料A）

『論衡』「正説篇」の中の「論語」を説く部分「説論章」には誤脱が多く、意味が通じないところがたくさんある。それについてかつて武内義雄が「論語の研究」という文章の中でそれなりの訂正を行なった。著者はそれにまだ満足せず、武内義雄の考証を踏まえながら、疑問を提示して自分の意見を打ち出した。

まず、前半部分で策牘の長さを論じる部分は、「説論章」のほかの部分と合わないから、それは錯簡ではないかと考え、その部分を抜いて、他の部分を「説論章」の文章とした。

後半部分は、その「錯簡」と疑われた文章は、『論衡』の「謝短篇」の中の文章の一節ではないかと考え、それを「謝短篇」の関連部分に入れて検討し、自分の考えが正しかったという結論に到った。

東洋史の大家がよくこのような綿密な考証文章を書いたなと感心した。敢えて意見を述べれば、氏が行なった「説論章」に対する訂正は、一理はあるが、あくまでも宮崎氏の推測で、「他の資料の現れるまでは、疑問を存して利用する」しかない、と宮崎氏自身も言っている。

1973年

大久保隆郎「後漢禮教主義の一側面―「論衡」習俗批判の分析―」『漢文学会会報』32、1973年6月

大久保隆郎「『論衡』習俗批判考」『福島大学教育学部論集』人文科学部門25-2、1973年11月

1974年

秋吉久紀夫「陳海闊の《王充の哲学思想》をめぐって」『目加田誠博士古稀記念中国文学論集』、龍溪書舎、1974年10月（約16,000字、関連A）

20世紀40年代の中国共産党の延安時代に発生した王充思想をめぐる論争を紹介した文章である。

陳海闊の「王充の哲学思想」は、1941年12月延安で発行された『解放日報』に掲載されたもので、一見古代哲学思想を論じた文章に見えるが、著者によれば、それは向林氷という学者が1939年に出した『中国哲学史綱要』の中にある王充論に対する政治的意味を持った批判文章だ、ということである。秋吉論文はその論戦の双方の主張と分岐および政治的、理論的背景を詳しく論じた。

秋吉論文を読まなければ、この60年前の論戦は恐らく中国の哲学史家には忘却され、あるいは歴史の紙くずに埋もれていたであろう。現在から見れば、この論戦を通じて、中国では王充研究は早くも40年代から学術研究の範疇を越えて政治上、イデオロギー上の問題になっていたことがよく分かる。

大久保隆郎「王充の法家批判―「非韓篇」分析―」『福島大学教育学部論集』人文科学部門26-2、1974年11月

嶋田勝義 「『論衡』の論理について—死生観を中心に—」『フィロソフィア』62、1974年12月
(17,000字、思想A)

雑家といわれるほどの王充と『論衡』の思想の多岐性の内在論理性を究明しようとするもの。

「まえがき」では、『論衡』に見られる煩雑さは、たとえば「天」「気」「性」「命」という語句は、「種種の思想体系を背景とするいくつかの観念を内包しているはず」だが、それを意識せずに使ってしまうところから生じたものだとして、思想的背景を用語の上から分析して、『論衡』の内在的論理を探ろうとした。

「一 生の契機及び由来について」では、論衡の言った「生」およびそれに関連する「天」「地」「気」「陰陽」「五行」の使い方を考察した。

「二 寿命について」では、王充の寿命論に「宇宙生成論から説く」ものと、「一般常識に基づく生命」と、「天命説」という三つの類型があると力説した。

「三 『鬼』と『形』とについて」では、論衡は死者の肉体から離れた精神的な働きをする「鬼」を認めていないが、祭祀を認めるのは儒家的な考え方だとした。そして、『論衡』は人鬼以外の鬼神と妖祥を認め「太陽の気」の働きだなどの理由を付けて解釈していた。

「まとめ」では、王充の思想理論の進め方から見て、それを道家的自然観に基づくものと、儒家的天命観に準拠するものと、常識的な考え方、という三つの立場に分類している。「付記」では、『論衡』の文章群を上記の三つのパターンで分類を試みている。

この論文は、王充思想の煩雑さの根源を突き止めており、また、王充の思想に対する評価の三つの定説、つまり「唯物論」「合理主義」（日本の言い方、中国では「科学精神の体现者」）および「無鬼神論」がほぼ確定的に見えた1970年代に、それにとらわれずに冷静かつ客観的に王充の思想の真相を探求した好論文である。もちろんその三分法にはまだ検討する余地がある。しかし、『フィロソフィア』という一見西洋哲学風の雑誌で発表されていたので、果たしてわれら「中国学」学界の学者らで、それを目にした者が何人いるだろうか。

1975年

大久保隆郎「王充の妖祥論」『福島大学教育学部論集』人文科学部門27-2、1975年11月

1976年

大久保莊太郎「論衡餘説」『羽衣学園短期大学紀要』12、1976年1月（約7,000字、思想A）

「余説」という言葉のとおり、本格的に王充と『論衡』の思想を研究したものではなく、『論衡』という書物を独自の考えから解説し評論したもの。

この文章が書かれたとき、中国では王充を反潮流の英雄とし、「優れた唯物主義的進歩思想家」とまで祭り上げていた。これに対して、作者は不満の意を抱いており、王充の民間の風俗に対する批判、孔孟韓に対する「問」「刺」「非」、歴史観—尚古反対と現政権の瑞祥論などを取り上げて、王充のそんなに「優れた唯物主義的」「進歩的」ではない、もう一つの側面を揶揄しながら暴露した。

吉田照子 「王充の「神人の分」について」『廣島哲学会『哲学』28、1976年10月（約13,000字、思想B）

王充の「たとえ聖人といえども神になれない」という「神人の分」の理論を論じたもの。

「(一) 神と氣」では、神と氣という従来の概念の持つ意味を述べ、墨家は神を超越性を持つ人格的な存在としたのに対して、道家は神概念に理念化・哲学化をもたらしたとして、王充の神概念は道家に属するとした。また「氣」について、氣は万物の構成元素であるとともに、生命力・神秘性・道德性をもつものという従来の氣概念に対して、王充は以前の氣論を受け継いだとした。神と氣はそもそも全く別概念であったが、王充は神と氣を密接不離なものとして、万物万象を全て氣で説く。このように、神はその人格性・神秘的な心の作用を剥奪され、氣の哲学の中に組み込まれた。一方、神と氣は万物に内在せしめられ、一種の汎神論になったという。

「(二) 神人の分」では、王充の言った「神人の分」とは、「たとえ聖人といえども神になれない」という理論であり、この理論は今までとそれ以後の理論とは、全く一線を画したもののとした。

「(三) 神人の分と天人の分」では、王充の言った天人関係は天人連続説で、つまり人は天に影響を与えられないが、仁義道德という人間の倫理は、天が賦与して人間に影響を与える、いわゆる天人一方通行説だという。だから、王充の「神人の分」は天の働きと人の働きを分離して別々の世界に属させるとしたうえで、一方通行天人説と神人の分の二重構造が王充の世界観になっているという。

この論文は吉田氏が女流王充研究者として書かれた初めての論文であるが、吉田論文群をよむと、論文作成の前に著者の意識の中にすでに王充は立派な合理主義者で、漢代およびあらゆる不合理な思想についていつも批判の態度で臨み、優れた説を提出したというイメージができており、著者の論文はそのイメージを証明し論述していくために作られたものだと論者は感じずにはいられなかった。さらに進んで言えば、吉田氏が言っている「合理的」とは、王充を基準にしているのみである。

大久保隆郎 「「呂氏春秋」と「論衡」」『福島大学教育学部論集』人文科学部門28-2、1976年11月

1978年

佐藤匡玄 「王充の孔子批判」上『愛知学院大学文学部紀要』7、1978年3月／佐藤匡玄『論衡の研究』、東洋学叢書所収、創文社、1981年2月

吉田照子 「「論衡」における「命」の性格—「氣」と連關して—」『福岡女子短期大学紀要』15、1978年3月（約14,000字、思想B）

王充の「命」と「氣」の関係を論ずるもの。

この論文の前提として、それまでの研究は王充の「命」論を彼のほかの説と矛盾する非合理的なものとしたが、論者はそれに納得できないので、その「命」論を王充の「氣」と結びつけ、「命」論の新しいところを見出したという。結論として、王充の「命」論にも合理的

なところがあり、非合理的なものと合理的なものとが混在しているのも、「気」の働きの結果だという。

この論文の根幹には、王充の「気」についての誤った先入観がある。つまり、論者は王充の「気」とは何かについて一語も論じていないのに、最初から「気」を「実態のある存在物」で、万事万物に内在しその根源でもあるものとして、王充の思想を述べている。そうであるから、王充の「命」論にあるはずの「合理的なもの」を探る論文の前提にも、論者は疑問を感じるのである。

大久保隆郎「桓譚と王充—神仙思想批判の継承—」『福島大学教育学部論集』人文科学部門
30-2、1978年11月

1979年

清水浩子 「王充の陰陽五行観について」『大正大学大学院研究論集』3、1979年3月（約8,000字、思想B）

王充の陰陽五行観を考察したもの。

「一」では王充の陰陽説を探求している。これによれば、王充は後漢時代に流行していた讖緯思想、特に天人相関思想を否定する一環として、自然現象を引き起こすものと万物の生成をうながすものを陰陽の気と考えていた。このような陰陽観は戦国時に流布していた素朴な陰陽観であったが、王充がその理論を発展させて運用したという。

「二」では主に王充の五行観について、五行相生と相剋説に対する批判意見を中心に探求がなされている。王充がその両説に反対するのは、五行説の王朝交代論を否定し、漢王朝の恒久性を論証したいためだという。

「三」は結語。以上の観点を再説し、陰陽は万物を動かす力を持つとする一方、五行にはその力がないというのである。

これまでの王充の陰陽五行観を論じた論著は、おおよそ気論の中で陰陽五行に触れている程度で、専門的に陰陽五行を論じたものはこれが初めてだといえる。しかし、この論文の前提は、陰陽五行を「元素」「物質」と認定することや、王充の陰陽の気についての解説は「天人相関説」に反対するものだ、などというものであったので、王充の陰陽五行ないし「気」の時代性については、戦国時代の「素朴な」陰陽観と五行観にその根源を求めており、王充が生活していた「漢」という時代や、王充は漢儒の一員だということを無視してしまったのではないかと論者は思う。

吉田照子 「王充の政治思想」廣島哲学会『哲学』31、1979年10月（12,000字、思想B）

王充の政治思想の中の不合理と見られる後漢王朝賛美論と王充の合理思想との矛盾をどう理解すべきかを探るもの。

「(一) 雩祭」では、王充が述べた雩祭の意義と聖人論を検討し、雩祭は礼・政治の一環であり、聖人には超能力がないというのが王充の考え方とした。

「(二) 天と人」では、王充の天人観は天人連続説、つまり人が気を媒介にして天に因循するものだという。

「(三) 聖人」では、天子は聖人としながら、鴻儒という政治とは別範疇の最高人格者を樹立したという。

「(四) 命定論」では、現実の無条件肯定ではなく、循命であり、また君主の責任を逃れさせるためではなく、君主の非合理的・神秘的力を排除し、君主の責任を明確にするためであったという。

結論として、王充の政治思想、とくに後漢王朝を支持し賛美したのは、天子を含めて全てを礼の世界に入れ、礼儀にのっとった政治のあり方を要求したもので、彼の合理的な哲学思想とは矛盾しない、少なくとも王充は矛盾を感じなかったと主張している。

論者は先に吉田論文群について、「論文作成の前に著者の意識の中にすでに王充は立派な合理主義者で、漢代およびあらゆる不合理な思想についていつも批判の態度で臨み、優れた説を提出したというイメージができており、著者の論文はそのイメージを証明し論述していくために作られた」と論じた。この論文は前掲の「『論衡』における「命」の性格—「氣」と連關して—」とは逆に、王充思想の中の「合理的でない」といわれる命論と頌漢論を「合理的なものも含んでいる」と弁護するために作られたと見られる。

大久保隆郎「桓譚と王充「一死生説の継承とその展開」」『福島大学教育学部論集』人文科学部門31-2、1979年11月

1980年

鬼丸 紀 「王充の養生論」『中国哲学』第九号、1980年4月（約16,000字、思想A）

王充の養生論を探求するもの。

「一、はじめに」では、中国古代には三種類の養生法があるという。一つ目は莊子の、二つ目は『淮南子』の儒家式修身法、三つ目は道家式の「導引」法。文章の目的を王充の養生法とそれらと比べることとした。

「二、王充の体質の問題」では、王充が行った「導引法」批判（道虚篇）を考察した。

「三、『養生』という書物について」では、王充の『養生』という書物は現存しないものの、その内容は多分「自記篇」に残っていると推測し、その関連する内容検討した結果、王充の養生法は莊子の養生法と似ていると述べた。

「四、王充の生命観と養生論」では、「自記篇」以外養生思想を論じ、「閉明絶聡、愛精自保」を王充の一貫の思想とした。

「五」は結論。

松尾善弘 「問孔篇初探」『鹿児島大学教育学部研究紀要』人文・社会科学編31、1980年3月／松尾善弘『批孔論の系譜』、白帝社、1994年2月（約23,000字、思想B）

「問孔篇」の一部分を綿密に読み解いて、それらの王充の批判を朱子の解釈と対比し、王充の孔子批判のユニークさを探求したものである。

そもそも、王充の孔子批判は、古来「聖賢」に対する侮辱として非難されてきた。一方、中国の文革期に行われた「批林批孔」のなかでは、王充の孔子批判は「反潮流的」と絶賛された。文革後、中国では王充の孔子批判に対する評価が割れてきたが、日本でも王充の批判

は「理解のない仕方では『論語』に攻撃を加えている」（白川静）という見方もあった。この論文は上記の賛否の両評価を意識して書かれたものだが、著者の着眼点と基本的立場は、やはり王充は立派な唯物論者（プラス弁証法論者）で科学的な思想の持ち主だ、というものであった。その立場を維持するために、論者が取り上げた「問孔篇」の部分は、孔子批判の中の、わりとまともな部分、に限られているので、孔子批判の全体像を理解するにはまだ不十分だと思われる。

堀池信夫 「王充『論衡』の思想における批判的合理性と科学的思惟との関連をめぐる若干の問題について」『漢文学会会報』38、1980年6月（堀池信夫『漢魏思想史研究』第二章「三 知識人の合理性」の「一」として書き直された。明治書院、1988年11月）
堀池氏著『漢魏思想史研究』第二章「三、知識人の合理性」の一節に対する評価を見る。

大久保隆郎「桓譚と王充Ⅲ—祭祀観の継承とその展開—」『福島大学教育学部論集』人文科学部門32-2、1980年12月

1981年

清水浩子 「鬼神について—『論衡』を中心に—」『大正大学総合佛教研究所年報』3、1981年3月（約9,000字、思想B）

王充の鬼神論を論ずるもの。

「一」と「二」では、王充は当時の人々が考えていた死霊＝鬼の存在を否定し、人が死んだら人に害を加えることもできないと主張したという。

「三」では、王充は人間以外の鬼が存在しており、その鬼は万物の一種類で、人間とは別範疇だと認識しているという。

「四」では、王充が述べた鬼の現れ方について、王充は鬼は妖気、妖祥のようなもので、人が死に臨むとき一つの兆候として現れると考えているとした。

「五」では、王充は「人が死ねば鬼にならない」という理論を主張したのは、厚葬の習俗に反対し薄葬を提唱するためだとした。

鬼神論については、日本語のものでも、それまでいくつかの優秀な論文が出ているが、清水論文は御手洗勝氏のそれにしか言及していない。結局、この論文は新しい見方を一つも打ち出していない。先学の見解に触れないままで文章を作成しているのが、清水論文群の最大の欠陥といえよう。

清水浩子 「董仲舒と王充の情性観について」『駒沢大学外国語学部論集』14、1981年9月（約5,000字、思想B）

董仲舒と王充の情性観の区別を論ずるものである。

論文によれば、董仲舒は「情」は陰気から生まれるので卑であり、「性」は陽気から生まれるので「仁」だとして、性と情は同じものだと考えているが、王充はその説が間違いだと批判したという。その批判の上に王充は自分の情性論を展開した。王充は人の情を「好悪喜怒哀楽」とし、人の性を卑謙辞讓（或いは仁義礼智信）として、人の性情は陰陽から生まれ

るが、性情は人が生まれる時の「稟気の渥薄」によって決まるとする。また、その相違は、両者の陰陽観に由来するとした。

比較的短い文章で、いままでの研究成果を踏まえていないので、どれが自分の見解で、どれがいままでの共通の見解であるかわからない。おそらく著者が大学院で出したレポートであったのだろう。

1982年

赤堀 昭 「医学の一段面－王充の『論衡』を中心に」、『東洋の科学と技術・薮内清先生頌寿記念論文集』・薮内清先生頌寿記念論文集出版委員会編、1982年（約17,000字、思想A）

『論衡』を中心に、六節に分けて、後漢初期の医学理論を探求するもの。王充に関連するものは第三と第四節のみ。

1983年

石田秀実 「『論衡』における性」金谷治編『中国における人間性の探究』創文社1983、2、／『こころとからだ－中国古代における身体思想－』中国書店1995年所収（16,000字、思想B）

王充の「性」論を人性論と「命」論に分けて論ずるもの。

「一 前提となるいくつかの概念について」では、まず王充の自然観が「気」論の上に立てられており、「性」の構造も「気」によって説明されることを確認した。次に「性」という概念の二つの意味、つまり「性」と「命」および互いの関係について詳しく説明した。「性」は人性の善悪や実践の素材・素質で、「命」は人の生命の長短と遭遇、とした。

「二 性の形而下的理解」では、「性」と「命」について別々に考察している。「性」についての考察では、まず正、随、遭という三性説を論じ、「気」論に基づく王充の性論において、人性の善悪は（先天的に稟けた）「気」の偏りによって変化し、性の善悪は相対的なものだという結論である。ただし、その相対性は『論衡』の文章によって変わっていると指摘した。「命」についての考察はやはり正、遭、随命の順番で行われ、寿命を決めるのを天から稟けた「気」とし、禄命を決めるのを「星の気」としたのである。

王充の「性」論を比較的詳しく論じているものの、それまでの王充研究、特に日本の学者たちはこの問題についてかなりの成果を挙げていたのだが、本論ではあまりそれが反映されていない。

嶺崎秀雄 「王充の薄葬論小考」『佛教論叢』27、1983、9、（約3,500字、思想C）

王充の薄葬論を論じた短いエッセイである。

まず、王充の薄葬論の理論基礎を「死人無知、不能為鬼」という無鬼神論にあるとした。また、王充は儒家と墨家の説に対して、無鬼論の立場から反論したが、喪祭を行なうことには「報功」と「崇恩」の意義があると主張したことを明らかにした。完全にそれまでの王充研究の成果を踏襲したものである。

小池一郎 「『論衡』における意・数・体」『中国文学報』35、1983、10、(約30,000字、関連A)
王充の文章構造論を探究したもの。王充の文章論では、文章を構成するに当たって、「意」つまり主体の考え、「数」つまり文章の「筋」と論理、「体」つまり文章の本体「からだ」という三者の統合があって、初めて一つの文章を完成することができるとした。著者はその三つの概念を中心に、豊富な資料を駆使して王充の文章論を探っている。

大久保隆郎「王充伝私論Ⅰ—王充の家系と幼少時代—」『福島大学教育学部論集』人文科学部門35、1983年12月

大久保隆郎「『後漢書』王充伝質疑について」『福島大学教育学部論集』社会科学部門35、1983年12月

大久保隆郎「『論衡』と江戸漢学」『言文』31、1983年12月

1984年

大久保隆郎「章炳麟と『論衡』」『福大史学』、1984年3月

石田秀実 「『論衡』と医術」『集刊東洋学』51、1984年5月／「『論衡』の医術と養生説」『こころとからだ』、中国書店1995年所収(約25,000字、思想A)

医学の角度から王充思想を探究した特殊な論文である。

「一、人体の身取図」では、人の構造を王充がどう説明しているかを論じた。まず、人体は陰陽二気によって構成されるが、体気は「体内の脈を廻る営気と、脈外の組織を充たす衛気に区別される。論者は王充のこの二気理論を論じ、また「心」「肉体」「五臓」「骨節」についての理論も述べた。

「二、病因」では、王充は人の病因を外因と内因に分けていることを明らかにした。

「三、病理」では、体の気、血脈などが不通になり、断欠になり、あるいは邪気が異物を生じて、病気になるという王充の病理説を論じ、いくつかの具体的な病気の病理も解説した。

「四、治療」では、減少した営、衛気の補充と血脈の疎通が王充の治療法であるとした。

「五、巫療との関係」では、王充の時代は巫と医とは常に並存するとしたが、王充は巫と医とをはっきり区別しているという。論者はまた王充の神妖説と巫との関係を論じた。

「六、二つの二元論」では、病気の治療には、邪気が生じた異物の排除という二元論的な硬い方法と、陰陽を調和し血脈を疎通する二元論的な軟い方法があるが、様々な資料からみれば、調和疎通という方法にはあまり言及されていない、という。

「七、憑依と夢の身体論」では、互いに相手を排除する硬構造の二元論は、伝統的な観念、特に鬼崇論に関わると述べ、精神と肉体の関係も論じた。

「八、養生書について」では、王充はそもそも人の寿命を定める体気について変化の可能性を否定していたが、晩年に書かれた「養生書」では、体気の減少防止による延年の術を追究したとしている。

先入観無しで豊富な医学知識を駆使して王充の医学思想と医術を探究した点ではかなり高

く評価できるものである。

大久保隆郎「王充伝私論Ⅱ－洛陽遊学とその時代－」『福島大学教育学部論集』人文科学部門36、1984年9月

大久保隆郎「史子魚と蘧伯玉」『言文』32、1984年12月

大久保隆郎「『後漢書』王充伝質疑について（承前）－徐氏の批判をめぐって」『福島大学教育学部論集』社会科学部門36、1984年9月

1985年

大久保隆郎「王充伝私論Ⅲ－著述・仕官とその時代（一）－」『福島大学教育学部論集』人文科学部門37、1985年2月

戸川芳郎 「識緯思想と王充」戸川芳郎『古代中国の思想』第12章、放送大学教育振興会、1985年3月（約9,000字、思想C）

放送大学のテキストの一節。篇名は「識緯思想と王充」となっているが、識緯思想と王充との関係を論ずるのではなく、両者を偶々一節に入れただけであり、「王充」に触れた部分は四分の一程度で、しかも戸川氏が得意とする命定論の簡単な紹介に留まり、王充の他の思想については当時の一般論の範囲を出ていない。

大久保隆郎「楚王英事件と王充」『集刊東洋学』53、1985年5月

滝野邦雄 「王充研究論考目録（1968—1982年）」、『中国研究集刊』地号、1985年6月（約7,800字、資料A）

約14年間の日本と中国（台湾を含む）における王充研究論著訳著の目録計52点を集めたものの。

大久保隆郎「王充伝私論Ⅳ－著述・仕官とその時代（二）－」『福島大学教育学部論集』人文科学部門38、1985年11月

大久保隆郎「後漢章帝建初の治世について－『論衡』著作の史的背景－」『福島大学教育学部論集』社会科学部門38、1985年11月

大久保隆郎「石陽点和刻本『論衡』と馬琴の受容」『言文』33、1985年12月

滝野邦雄 「王充における道德の実践」『待兼山論叢』哲学19、1985年12月（約9,000字、思想A）

王充の「知」、つまり道德の実践について論じたもの。

「一、人間の認識能力」では、王充は人間の「知」が「天」から与えられたものだとしたことを明らかにした。

「二、王充における天の意味」では、王充が言った「天」は、物質的な性格を有するだけでなく、万物の統一者とも認めているとした。

「三、天の知り方」では、王充は、統一者としての天の摂理性は人間に理解できないが、人間が天の行動に合致すれば、天の摂理を知ることができるとしたことを指摘した。

「四、聖人による道德の実践」では、王充は人間の善行は統一者の行為である天道に合致しているか否かが、道德の判断基準となり、それに合致できるものは、聖人しかいないとしたことを論じた。

「五、聖人以外の人間の道德の実践」では、聖人以外の人々の道德実践は、学問や知巧を加えて実践すればよいという王充の考えを明らかにした。

この論文の最大の特徴は、王充の言った天が物質的な性格を有するだけでなく、万物の統一者としての性格を有することをも明らかにした点と、人間の道德実践は、物質的な天ではなく、統一者の天に則ることを明らかにした点である。それまでの王充研究は、王充の言った天は唯物的なものであるといい、「自然無為」の一点張りであった。この論文は朱子のことを引用して、中国伝統思想の中の天概念は、自然物、主宰者、道德の最高判断基準（朱子はそれを「理」と同義と考えていたが、王充の時代にはまだそこまで発展していない）を含んでいることと、王充の天概念もその範囲を逸脱していないことを明らかにした。日本だけではなく、当時の中国の王充研究でも、その見方を主張する人は誰もいなかっただろう。ただし、著者はその点について、従来の王充研究に妥協して、主宰者と道德の「理」の体现者としての天を、「統一者」と曖昧に表現している。よく考えてみると、王充の統一者の「天」は、当時漢儒らが言っていた「天者、群物の主」「万物の本」という考えとほぼ一致するのではないかと論者は思う。

1986年

大久保隆郎「王充伝私論Ⅴ—王充の著作意識について—」『福島大学教育学部論集』人文科学部門39、1986年3月

大久保隆郎「王充伝私論Ⅵ—王充の文章論について—」『福島大学教育学部論集』人文科学部門40、1986年11月

1987年

大久保隆郎「王充伝私論Ⅶ—統・王充の文章について—」『福島大学教育学部論集』人文科学部門37、1987年3月

戸川芳郎「王充—孤高の実証的批判家—」日原利国編『中国思想史』上、ペリカン社、1987年3月（約9,000字、思想B）

「中国思想史」という大衆向きのテキストの一節。

まず、王充の生涯、論衡という書物および王充の天と人性論については、それまでの一般説に基づいて簡単に紹介し、無難な書き方に終始している。「命定論」と「人材と文章」の二章では、前掲の著者の「王充命定論試探」と「王充人格論弁説」の主要観点を簡単に並べている。

戸川芳郎 「王充」戸川芳郎、蜂屋邦夫、溝口雄三『儒教史』、世界宗教史叢書10、山川出版社、1987年7月

戸川芳郎 「命定論その他」(同上)(約7,000字、思想C)

同じく一般向けのテキストの一節として、前掲の「王充—孤高の実証的批判家—」を踏襲し、大部分はそのまま移してきたもの。

見初敏枝 「王充と『論語』の精神」『九州大学中国哲学論集』13、1987年10月(約25,000字、思想B)

王充の学問と思想が、漢代儒学の弊、つまり天人相関、災異論、讖緯説などを越えて、その源を儒学の原典、つまり尚書、春秋、特に論語として展開していく。著者は、王充がいかにして孔子と論語の原儒精神に基づいて漢儒の弊を越えていったかという、その過程と思想の軌跡とを追究している。

この文章の宗旨と立脚点には優れたところがあると認められるが、論文の流れは(論文の書き方と思惟の展開を含めて)混乱しており、論理性に欠けているのも否めない。したがって、しばらく疑いを存す。

辺土名朝邦「揚雄・桓譚・王充—三者における思想的継承の問題について」『西南学院大学国際文化論集』2—2、1987年12月(約25,000字、関連A)

著者は広い知識と資料を駆使して、揚雄、桓譚、王充の三者の思想的継承の問題を検討したもの。

まず、三者の著作を詳しく調べて、十の問題事項について三者の思想継承が認められるとした。

第二節では、東方朔伝説への批評という点について、三者がともに東方朔を神人化していく伝承故事に懐疑的で、それを否定していたことを明らかにした。その否定の根底には「虚妄をにくむ」という批判精神があったとした。

第三節では、「土龍致雨」についての三者の態度を検討した。揚雄、桓譚は差がありながら基本的に否定的な態度を取っていたのに対して、王充はその両者の態度を踏まえながら、土龍擁護論を展開していた。

最後に、桓譚との劉歆の思想と行動に対する態度を検討した。結びとして、論者は、三人の思想の一部に、問題事項について自覚的な継承が認められるとした。しかし、これは三者が同じ思想の学派を形成していたことを意味しないとした。

三者の関係について、中国では鐘肇鵬氏が『桓譚・王充評伝』(南京大学出版社1993年)の「桓譚評伝」で論じている。それによれば、桓譚と揚雄の関係は「師友の間」だとした。また、桓譚と王充の継承関係について、一節を設けて、その思想の継承を六つの方面に分けて論じている。辺土名論著の特徴は、その三者の思想をまとめて検討していることである。

その研究成果は後の「揚雄・桓譚・王充—三者における聖賢論と本性論の展開」（『西南学院大学国際文化論集』3—2、1989年2月）にも続いている。

1988年

吉田照子 「王充の性説—性と命と情と氣と—」 広島哲学会『哲学』40、1988年12月（約12,000字、思想B）

王充の人性論を「性と命」「性と情」「性と氣」という三つの部分に分けて論ずるもの。

「性と命」では、王充の人性論と命論とを結び付けて論じ、人間性と社会的な処遇とは必ずしも一致しないとする理論が、固定化した後漢社会の反映だ、とした。

「性と情」では、陰陽、五行、元気で性と情の理論を説くところは道教の影響が見えるという。また、「性と氣」では、王充は氣の説では儒家理論を説いている、という。

吉田氏の王充観は、「合理主義」という先入観に囚われすぎているのではないかと思われる。論文のなかでは、王充の思想を「合理主義」だと賛美の言葉を頻発する挙句、合理主義に反するものを「消極的な合理主義」「機械的合理主義」「非合理も認める合理主義」「比較的合理主義」と苦しい弁解をしているところが目立つ。そして、陰陽、五行で性と情の理論を述べることを「道家の影響」と位置付けたが、それはありえまい。周知のとおり、漢儒（特に「讖緯説」）の最大の特徴は、陰陽五行を使って儒教理論を展開することであった。また、王充の「氣」は漢代に流行した漢儒の陰陽五行の氣そのものだと思われる。陰陽五行を「道家」、「氣」を「儒家」とする分け方は論者には難解である。

堀池信夫 「王充の批判的合理性と科学的思惟」 堀池信夫『漢魏思想史研究』第二章「三 知識人の合理性」の「一」 明治書院、1988年11月（全部約41,000字、王充の思想に関する部分は20,000字前後、思想B）

『漢魏思想史の研究』は研究書、中国語で言えば「専門著作」なのか、それとも中国哲学史の一般読者向けのテキストなのか、その性格ははっきりしない。その曖昧さは、王充の思想を論ずるこの部分にも影響を与えている。

この著作は、王充の思想についての部分はほとんどそれまでの王充研究を踏襲しているだけである。たとえば、王充の思想は合理的、科学的だといわれてから、胡適の発明（1919年前後）から1988年までとして数えると、もう70年の歳月が経っていた。この論著は新たに王充の合理性と科学性を論証するために、やはり王充の批判論を挙げるしかなかった。ただ、王充の批判をひたすら賛美するにとどまらず、批判論の批判対象、方法および批判論の構造的な欠陥、つまり、「天人感應否定の合理性」とすべての物事の自生自化という「宿命論」との矛盾に触れたのが、この論著の唯一の特徴であった。しかし、王充の批判論の対象、方法などについて、先入観を排して分析すれば、時々破綻を見せることは、著者も分かっていたはずである。たとえば、王充の神仙と昇仙否定は、「道を為す者、金玉の精を服し、紫芝の英を食せば、精を食して身軽きがゆえによく神仙たり」として、食していない人は神仙になれない、という論理展開である。これは神仙論批判というよりも、神仙論の宣伝ととれることばであろう。著者もそれについて、「議論の目的の合理性に比して、必ずしも十分に説得できるものではない」という疑問を感じるが、やはり合理的だと論断する。それでは一

体、合理的とは何か。著者はこの論著において王充の思想を頻繁に「合理的」と褒めまくっているが、「合理的」とは意外にも哲学史研究者の心の中の先入観に過ぎないのではないかと思われる。

ちなみに、医学の視角で王充をはじめ漢代の思想家たちを捉えた部分の方が興味深く、むしろ価値がある。

1989年

辺土名朝邦「揚雄・桓譚・王充—三者における聖賢論と本性論の展開」『西南学院大学国際文化論集』3—2、1989年2月（約19,000字、関連A）

テーマのとおり、揚雄、桓譚、王充の三者における聖賢論と本性論の展開と継承を検討するもの。

「一」では、揚雄の聖賢論と本性論を考察した。揚雄は聖人の神力を求めず、衆人、賢人、聖人は一種の階段的区分であって、勉強すれば、衆人でも聖人になれるとした。

「二」では、桓譚は聖人の神秘的な能力を認めており、しかも賢人がいくら勉強しても聖人になれないとしたことを明らかにした。

「三」では、王充は人を上中下に分けて、上人に性善説、下人に性悪説を適応させた。聖人とほかの人とをはっきり分けるのは、桓譚の説に似ているとする。中人については、王充は揚雄式の性善性悪混在説を応用したことを明らかにした。それによれば、中人なら勉強すれば、聖人にも賢人にもなれるが、その聖人は天性の聖人とは別格だという。

結びとして、まず、三者の共通点は、賢者における「知」のあり方を論じたことにあるとして、それは当時の歴史背景と関わるとした。第二の特色として、三者には聖賢論と本性論の独自の展開があるが、問題意識の継承も認められる点があるとする。

論者は先ほど「辺土名論著の特徴は、その三者の思想をまとめて検討することである」と述べたが、しかし、場合によっては、無理に三者の同じ思想の継承を検討しなくてもよいと思われる。たとえば、聖人と賢人とをはっきり区別することは、桓譚と王充の継承は明らかであるが、揚雄と王充の関連といえばあまりないと思われる。逆にいえば、問題によっては、揚雄と桓譚の関連、桓譚と王充の継承、と個別的に検討してもよいのではないか。そうすれば、その思想の継承関係をより深く探求することができるのではないかと論者は思うのである。

柳瀬喜代志「『短書小伝』考—中国古代説話前史—」『早稲田大学大学院文学研究科紀要』文学、芸術学編34、1989年1月（約11,000字、関連A）

『論衡』に「三増九虚」といわれる一組の文章がある。これらの文章において、王充は「短書小伝」という当時の説話を取り上げてそれらを「虚妄」の例として批判し、「実事」を闡明することにつとめたと言われる。この論文は文学の立場と説話の歴史から、王充の批判を検証して、王充に批判された「短書小伝」あるいは「歴史説話」は「実に当時の風潮を写した言」であるとして、王充の批判は文学の立場と説話の歴史からみればあまりよろしいことではないこととしたのである。

王充の批判論のなかで、文学上の誇張などに対する批判は、中国語では「無聊」、日本語

的に言えば「くだらない」といわれている。たとえば、この論文で言及している「哭長城」の例がそれである。この論文は王充の批判論を本格的に文学の角度から検証した日本で初めてのものといえよう。

林 正 基「王充の自然的世界観」『集刊東洋学』59、1989年（約20,000字、思想B）

王充の自然的世界観を探るものというよりも、「気」自然的角度から王充の「人類社会観」を探るものと言った方が正しい。従来の王充研究は王充の社会観について唯物論的と非唯物論との二つの枠組で研究してきたとして、著者は「気」の自然性に焦点を合わせ、「自然的世界観」つまり王充の気と人間社会に関する思想を検討した。

「Ⅰ 気の自然」では、まず「天」と「気」という概念を検討して、天と気は根本的な実在者として、その存在様態は天という実在の中に気という実在が含まれており、両者一体の状態、天の主要な動きは気を施すことだという。また、王充は天と気の作用を天道と表現するとして、天道の特徴を気の自然無為性だとした。

「Ⅱ 人間世界の自然」では、気其自然性から人間そのものと人間社会と「気」の関係を王充がいかに論じたかを探求した。その結果として、人間の動きも社会の動きも気其自然無為の動きのみとしたが、人間においては気の厚薄、尊卑によって生まれつきの必然的な命があって、気から得た有為的な性があるという。また、その命と性は、必然と偶然の世界を構築したという。

この論文を評論するのは難しかった。著者は従来の観点から新しいものを見出すことに努めたが、従来の研究で規定した王充の「天」「気」「命」「性」「必然」「偶然」ないし「自然無為」などの概念の定義を弁別せずにそのまま使って論述を展開していった結果、出された結論も従来の研究範囲を超えなかったものと思われる。

林 正 基「王充における自然的世界と価値世界—「気」と「精神」—」『文化』53—1・2、1989年9月（約20,000字、思想B）

王充の思想はすべて「気」の枠内で説明することができるとして、人間の世界においては、その根源を「気」に置き、自然無為的「気」によって人間社会のすべてが決められる、という「気」論に基づいて、人間世界、特に精神世界の根源、作用、性論および人間の価値を探究した論文である。

結論は、王充の思想には「気」の世界とそれと区別される精神世界とがあって、王充は「気」で精神世界を説明しようとしたが、精神世界と自然界との差があまりにも大きすぎたので説明し切れなかった、ということである。

結局、著者の論述の前提と結論は矛盾すると見られる。その矛盾はどこから生じたかといえば、王充の思想に対する全体的な認識が間違っていた、ということである。まず、論者は王充の「気」概念に対して正しく認識できなかった。王充の「気」は種類からみれば物質的なものであるだけでなく、精神的ないし神秘的なものも含まれているが、著者は「気」を精神世界の対立物と見なしてしまった。「気」とはなにかさえも説明していない。そして、王充の思想体系では確かに「気」の役割が大きいといえるが、「人間世界のすべて根源は「気」に置き、自然無為的「気」によって人間社会のすべてが決められる」ということまでは言えない。言い換えれば、その前提は正しくなく、すでに著者の結論によって否定されて

いるのである。

鄧 紅 「王充の哲学体系における命論の役割」『九州大学中国哲学論集』15、1989年10月（約16,000字、思想A）

王充の思想体系の中で「命」という概念がいかなる役割をはたしているかを探求するもの。

王充の批判論において、「命」論は大きな武器であり参照標準である。王充の人間論は、主に個人の「吉凶の命」と才命・生命という二つの系統から構成される。王充の社会・歴史観は「国命」にほかならない。彼の自然観では、自然界は「自然の道」と「適遇の数」という命論的な要素で支配されるとする。このような「命」論の役割の探求を通じて、「命」は王充の哲学体系において最重要的なものだということを明らかにした。

柳瀬喜代志「説話の方法—中国古代説話前史（続）『中国詩文論叢』8、1989年10月（約18,000字、関連A）

前掲論文に引き続き、王充の「説話小伝」に対する批判を文学的に再検証したもの。特に「三増九虚」の例を取り上げている。結論として、王充の批判、つまり「実事」の顕彰の行動は「己れの儒学正統を保守する」ことにあり、批判の標準に経典とその学を立てて行っていた、としたのである。

思うに、実は王充の批判論の動機はもっと複雑なところにあるのだが、これについては本書の「王充批判論新議」の一説を参照されたい。

笠原祥士郎「王充における認識と実践」『集刊東洋学』62、1989年11月（21,000字、思想B）

まず、王充を広範囲的、徹底的な批判家として捉え、論文の主旨をその批判主義を支える認識論を考察するものとした。

「1」では、なぜ世の中の人々は「虚妄」に陥りやすいか、それは人間と社会は様々なドグマに取り囲まれていたからだ、と、王充は認識しているとする。正しい認識を得るために、そのドグマ的なものに対して、王充は批判論を展開したとしたのである。

「2」では、王充の認識論について考察した。王充は道家的な認識方法を評価し批判しつつ、「効驗」という認識方法を提起したうえで、「心」による「詮訂」（考之於心、効之於事）も強調していたという。

「3」では、王充は世界に存在するすべてのものを「物」と「気」、つまり「有形」と「無形」の存在という二つのものとしているという。気は認識できないものとする一方、物、事については、気と理のレベルで説明しようとしたという。

「4」では、王充は人間を「気」によって構成されるものとして、気で人の命と性を解明しようとしたという。

「5」では、王充が言った「天」の性質を、（一）万物を生み出し、万物は天地の間で育つ、（二）天は長生不死なる存在、（三）時間を超える普遍的な存在、（四）自然無為、とした。結論として、著者は、王充の認識論はすべての事柄を客体化する態度と科学的認識態度として、人間の人生と人命も客体化して捉えようとしたものだという。最後に、著者は、自分の結論をいままでの研究成果と比べて、その区別、つまり新しい観点とはなにかを述べた。それはすなわち、天地の自然条理を人の「善心」と照らし合わせれば、正しい認識が得られ

る、という点である。

たいへん長い論文で、論じられた内容も多方面に渉る。しかし、論文の起点に問題があると思われる、つまり、王充をとりあえず偉大な批判家として捉えてから、彼の批判論がなぜそんなに素晴らしいかを探究するというやり方は、先入観のある研究法といえる。そして、王充は世間のすべての物を「物」と「気」に分けて認識しようとしたという論者の観点にも疑問がある。「心」の認識論の提起は面白いが、もっと論証すべきではないかと論者は思うのである。

藤居岳人 「王充の命」研究史『中国研究集刊』荒号、1989年11月（約6,000字、関連A）

それまでの王充の命論に関する研究成果を再検討した特殊な論文である。

まず、命の種類の研究について、著者は森三樹三郎氏、佐藤匡玄氏および戸川芳郎氏の命論に関する3本の論文を中心に、王充の述べた「命」の種類および関連性についてのそれぞれの観点を考察した。

次に、偶然性と必然性の関係について、今までの研究に二つの流れがあったとした。一つは、戸川氏と佐藤氏の偶然性と必然性を二つの理論として捉え、二つの関係を表裏一体の相補う関係にあるとする観点である。もう一つ、偶然性と必然性を同一視する立場の論考があり、それは主に中国側の研究者の見方であった。また、偶然、必然を「自然」と同一する研究者もいるとした。もちろんそれに同意しないものもいる。それに対して、著者は皆の「自然」という言葉の語義に対する認識の不一致が認識の分岐を引き起こしたと指摘した。なかなか正論である。

最後に、「命」論の思想史的意義について、それぞれの論考を考察した。日本の学者はおよそ命論を積極的に評価するのに対して、中国側の学者はみな命論を王充思想の弱点とした。これは命論に対する評価が、唯物論にこだわった一面的評価だからだ、と著者はいう。

ある特定な思想の研究史をピックアップしてそれらの研究成果のポイントをまとめることは、自分のためだけではなく、他の学者の研究にも有益である。ただし、著者の視野はやはりやや狭かった。今までの王充の命論に関する論著は他にもあるはずだが、著者はこれらについて検討していない。

1990年

鄧 紅 「王充の鬼神妖論について―「論死」「死偽」「紀妖」「訂鬼」四篇を中心として」
『九州中国学会報』28、1990年4月（約16,000字、思想A）

王充の鬼神妖論を探求するもの。

いままで王充は無鬼神論者だと評価されてきたが、この論文はまず、人間の崇拝には、「生」と関わる自然崇拝と「死」とかかわる祖先崇拝という二つの崇拝があったとした。王充の無鬼論は「人死為鬼」に限定し、つまり祖先崇拝の鬼に反対し、死人以外の鬼、神および妖、つまり自然崇拝の鬼神妖については反対していなかったことを明らかにした。また、「論死」など四篇において王充の鬼神妖に対する見方とその変化の軌跡を詳しく論述した。

1991年

原田正己 「王充の俗信否定について―主として雷霆の俗信について」『フィロソフィア』78、1991年3月『フィロソフィア』26、1954年3月、所載文の再録（約19,000字、思想B）

この論文は、王充がいかに神秘奇怪な説話を論破し、「俗信」を否定したかを、「雷霆」の俗信を通じて明らかにしようとするもの。

「一」では、「龍虚篇」における王充の「天取龍」の説に対する批判を考察して、王充は虚偽の龍説を批判したが、実在の角度から龍の存在を論証したと言う。

「二」では「雷虚篇」の中で雷を「天怒」とする説に対する批判を考察した。

「三」では、王充が雷を自然現象としてみるのは、合理主義的傾向の現れだとした。

「四」では、王充の龍、雷説の両面性、つまり、合理性があると同時に、「受命の証」と「吉祥の瑞」とする傾向もあるとした。

『論衡』全体を調べると、王充は根本的に「龍」そのものおよび「龍」の神話に対して、ほとんど否定していないことが目に付く。たとえば、彼の「頌漢論」では、「龍」を漢王朝が聖朝である符瑞として取り上げたり、「乱龍篇」と「龍虚篇」では龍の存在を認めて、自前の龍に関する説を展開したりしているのがそれである。王充が反対しているのは、彼が信じない「天取龍」のような説話、「龍」と天子あるいは「龍」と「雷」との関連性のみであろう。原田氏のこの論文も王充の「龍」に対する神学傾向を認めながら、これを王充思想の「不徹底性」とみるか、このような文章は「王充が書いたものではない」として、信じがたい態度をとっているようであるが、それでも王充が「龍」の問題では「合理主義」的思想を提示したと言い張っている。これは先入観のある研究法の典型的なものといえよう。

笠原祥士郎「王充における自然と人間」『集刊東洋学』（東北大学）65、1991年5月（約23,000字、思想A）

王充の自然観を「氣」の自然的世界観とした上で、その自然と人間との関係を探究するもの。

「1」では、まず、王充の「性」と「氣」の関係を考察し、王充の言った「性」には可變的「性」と不可變的「性」があるとした。その「性」はあくまでも「氣」の働きの結果で、人間とは関係ない。しかし、人間には陰陽二氣に対して影響を及ぼし「性」を変える一面もあると言う。

「2」では、「命」および「命」と「氣」の関係を考察した。この考察によれば、「命」には様々な形態があるが、基本的には「道家的」命論、つまり自然無為な命に対して、人間は因循するのみというものと、「儒家的」命論、つまり自然の氣に対してある程度の影響を及ぼせば、「命」を変えられないことはない、という二つがあるとする。

「3」では、王充の「氣」を考察した。それによれば、氣は様々な形で運行し、万物を生成し、自然、社会及び人間に影響を及ぼすが、人間はその「氣」の運動に対して介入する余地がないものの、ある程度（たとえば調和の維持など）は変化させることができる、という。

「4」では、上記の認識をもう一度確認した上で、王充の孔子批判の意義を検討した。その意義は、孔子の神化を否定することにあるという。

結びとして、性論、命論、氣論の考察を通じて得られた結果は、世界は「氣」に完全に支配されており、人間も例外なく肉体から精神まで「氣」に支配されている一方、人間の積極的な有為的な働きも必要だというものであった。王充のこのような自然観は、道家的な徹底的な自然無為に対する批判であるので、儒家的な立場にあると著者は言う。しかし、その儒家の立場は、あくまでも神秘主義化した漢儒のそれではなく、彼の孔子批判と同じく、儒家思想の再合理化をはかるものであった、ということになる。

王充の性、命論と氣論との関連をよくまとめた論文であるが、著者が述べたような性命論と氣との関係は、著者の結論、特に儒家思想の再合理化を計ったというのは、斬新な観点であるが、やや強引であることは否めない。性論の場合は、人間の有為的な働きは弱く、せいぜい「胎教」くらいであって、あるいは「中人」に対する変化に過ぎない。命論の場合は、百歳を越えた際に、人の行為で「氣」の不足を補うに過ぎなかった。また、氣論において、人間の氣、自然に対する影響は、自然に従うのみで陰陽二気の調和に努めるに過ぎなかった。王充の孔子批判も聖賢批判以外は、ほとんど理不尽なものばかりである（実はこの節は蛇足ではないかと思われる）。それだけで、王充の思想的立場は儒教的だと言うのは証拠不十分で、儒家の再合理化とも言い難いだろう。

大淵忍爾 「論衡・潜夫論と抱朴子」大淵忍爾『初期の道教—道教史の研究その1—』東洋学叢書、創文社1991年（第一節「論衡と抱朴子」約10,000字、関連B）

王充の『論衡』と葛洪の『抱朴子』とを比べてその関連性を探るもの。

1の「はしがき」では、王充と葛洪の出身を比べた結果、類似のところが多いため、葛洪は王充に親近感を持っていると推測した。

2の「外形の比較」では、『論衡』と『抱朴子』との外形を比較して、両者の類似点を探った。

「3」の「内容の比較」では、「反尚古主義」「祭祀観」「定命思想」「聖人論」「論理主義」などの方面で両者の類似点と相違点を探った。

二人の大思想家の著作から思想までを全面的に比較したものは、「潜夫論」の比較を含めて、大淵忍爾の「論衡・潜夫論と抱朴子」以外にはあまり見られない。この点を評価すべきか、それともすべきでないかは、簡単には言い難い。というのは、このような比較論を行うのは比較的簡単ではあるが、憶測の域を出るのがなかなか難しいからであろう。なお、この論文は王充研究よりも『抱朴子』研究の論著に属させた方がよいと思われる。

1992年

流王法子 「王充の「蓋天説」支持をめぐって」『東洋哲学論叢』（第二号から雑誌名は『論叢アジアの文化と思想』に変更）創刊号、1992年6月（約7,000字、思想B）

約七千字の短い研究ノートであるが、王充が蓋天説をどのように支持しているかを再検討したもの。

それによれば、王充の時代には、渾天説と蓋天説が並存しており、王充は一見蓋天説を支持し、渾天説を批判したと見られるが、実は蓋天説を批判する言論も『論衡』にはあるというのが結論である。なお、結論のところで、王充の天説に対する探求は彼の合理性、科学的

精神のなせるところ、あるいはその探求により彼の精神が培われた、という従来の研究者の定説に対して、著者は「再検討する必要がある」と疑問を投げかけている。

1993年

横内哲夫 「王充の天人相関説批判と蓋天説」『東洋大学大学院紀要』文学研究科29、1993年2月（約11,000字、思想B）

天人相関批判と蓋天説を王充の「天」についての見解として論ずるもの。

「一」では、いままでの定説を再論し、王充が天には無知で耳目がないので天と人の感應がありえないとしたことを理由に、天人相関説に批判的な態度を取っていた、という。

「二」では、「蓋天説」を主張して、その上で天地の距離、天地の形、太陽の位置などについての見解を述べたことについて探っている。

「三」では、王充が「蓋天説」を支持した理由は天人相関説を批判するためだという。

王充の天文学知識は豊富ではあるが、蓋天説は時代遅れということは間違いない、王充は当時の政治的中心に遠いところに住んでいたからだといわれている。また、王充は天と人の距離感から天人の「直接」感應説を批判したことがあるのも事実であるが、果たして王充は天と人の関連を否定しているのだろうか、著者が「自然篇」以外の文章を読む前に結論（といっても今までの中哲の教科書の定説）を出しているのは尚早ではなかろうか。とくに、王充が蓋天説を支持したのは天人感應論を批判するためだという結論は、あまりにも短絡的で、天文学の「天」論と哲学の「天」論とを混同しているのではないかと思われる。つまり、天文学上の「天」に対する探求が、そのまま哲学上の「天」説だといってよいのか、ということである。

大久保隆郎「王充伝私論Ⅷ—王充の晩年とその文体—」『福島大学教育学部論集』人文科学部門53、1993年4月

大久保隆郎「王充の頌漢論（1）」『福島大学教育学部論集』人文科学部門54、1993年11月

1994年

鬼丸 紀 「王充『論衡』と『論語』—後漢の批判精神」『論語の思想史』松川健二編、汲古書院1994年2月（約18,000字、思想B）

「問孔篇」を『論語』の注釈書として捉え、その注釈にあらわれた王充の考えを探求した論文。

「一 運命論」では、「問孔篇」の中の運命論を探り、その文章の中で王充が批判の武器として使っている運命論を「実証的」「合理的」な運命論とした。

「二 仕官論」では、王充の仕官に対する態度を探り、その仕官論は運命論とかかわり、孔子などを非難したのは、自分の態度が一番正しいとする王充の考えに基づくことを明らかにした。

「三 表現論」では、「問孔篇」が孔子の言葉の難解な点を批判したところを探り、王充

の文章の表現論の特徴を「平明」「明快」への追求にあるとした。

この論文は上記の三論における王充の孔子批判を考察し、王充の批判論の特徴を探っているが、王充の批判自身に対する評価を避けている。王充の孔子批判に対する苦渋に満ちた弁解と取れるような表現も随所に見られる。王充の運命論を「実証的」「合理的」なものとするのがそれである。

大久保隆郎「王充の発憤読書」説」、内藤幹治編『中国人生観・世界観』東方書店、1994年3月

1995年

大久保隆郎「王充の頌漢論」『栗原圭介博士頌寿記念東洋学論集』、汲古書院、1995年3月

吉川忠夫 「さまざまの神仙術－王充の神仙道批判」『古代中国人の不死幻想』、東方書店、1995年（約22,000字、関連A）

『古代中国人の不死幻想』は書名のとおり、中国古典、伝説の中の「不死」という幻想がいかにかえられてきたか、について論述した本である。「さまざまの神仙術－王充の神仙道批判」はこの本の第三章で、『論衡』の「道虚篇」で王充が批判した「化色五倉の術」、「淮南王劉安」「崑崙山」「山海経」などといったような様々な神仙説と道教の伝説を紹介し、その経緯と出典を解説したものである。王充の批判についてはほとんど「皆虚言なり」と紹介したにとどまった。しかし、最後の「養性の書」の一節では、王充の作品ですでに遺失したと言われる「養性の書」について論評している。王充は晩年になって、自分の説を修正し、養気、適度な飲酒、精気の保全などの方法で生命の延長ができるという説を提起したのは、神仙になろうとしたのではなく、不老の術であることを明らかにした。

笠原祥士郎「王充における鬼神と祭祀」福井大学『国語国文学』34、1995年4月（約20,000字、思想A）

王充の鬼神論と祭祀論を考察したもの。

著者の立場は王充の鬼神論について有鬼か無鬼かという問題自体に囚われず、王充は鬼神についてどう説明しているかを検討することにあつた。しかし、著者が「二」「三」の論証を通じて得た結論は、やはり王充は超越的能力によってたたりを行ない災禍や福祿をもたらすような霊的鬼神の否定を行なったので、宗教的・呪術的鬼神論においては無鬼神論で、「気」で鬼神を説明する自然論においては有鬼神論だというものであつた。また祭祀論において、王充のいう祭祀と葬送は宗教的・呪術的な意味を否定し、それらは日常の孝行の延長として生存の道・人倫の需要として認めたものとした。

王充は「気」論で世界の万事万物を解釈しているので、王充の鬼神論も「気」論で展開されている、ということについての論証は、今までの鬼神論に対する検討と違って新鮮味が感じられる。ただ著者は王充の「気」論にはまりこみ過ぎて、「気」によって説明されたものをそのまま信じ込んでいるので、「気」は王充の思想において何でも説明できる万能性、随意性を賦与されているという本質を見逃したと論者は思う。しかも、王充の「鬼神妖」に対する説明は、「気」にとどまらず、中国以外の「四辺の外」の凶悪な自然物でできた「鬼」

もあれば、「吉凶」の「妖祥」などもある（訂鬼篇）のではないか。

1996年

池田秀三 「実事求是の批判哲学—王充」橋本高勝編『中国古代思想の流れ』上 両漢・六朝、晃洋書房、1996年5月、(約6,000字、思想A)

王充思想とそれまでの王充研究のボロをあばきだしたもの。

序論では一応従来の王充研究を踏まえて、王充が批判家、唯物論者と定められた理由を述べている。しかし、著者はそれらの「健康的過ぎる」王充研究の見方に惑われず、それを保留しながら王充の哲学、特に批判論を「自慰行為」と位置付けている。

「二、批判の方法とその限界」では、王充の批判論の「実証」方法のよい点とその弱点を公平に分析した上で、『論衡』の矛盾点を六つの方面でまとめ、その矛盾の原因を分析した。

「三、命定論の構造」では王充の命論を分析した上で、王充の気一元論ならびに無為自然説、宇宙論もしくは存在論は命定論の要請からもち出されたものではないかと述べた。最後に、命定論は従来王充思想のもっとも遅れた部分とされてきたが、和者は「王充の思考方式の典型であり、最も高く評価すべきものとする」という結論に到った。

いままでの王充研究を根本から覆す論著で、実に斬新で痛快である。ただ紙面の関係であったからか、『論衡』の六つの矛盾点についてはもっと展開されることが望ましかった。つまり、専門的な論文の形で述べてほしかった。また、王充の批判論について、あんなに欠点だらけだというのであれば、もっとその批判の動機、目的、批判の是非、武器などを分析すべきではなかったか、と思われる。

内山俊彦 「王充の歴史意識について」『中国思想史研究』19、1996年12月（約14,000字、思想B）

王充の歴史論を論ずるものである。

「一」では、まず、王充前後の歴史観を述べている。それによれば、後漢に流行した歴史意識には、讖緯の予定決定論、あるいは必然論があり、これは前漢時代にあった循環論（三統説、五徳説、忠敬文説など）や尚古思想と同じく、「非歴史的歴史意識」に属するもの。また、班固父子の「王命説」も循環論で決定論であるという。

「二」では、王充の命定論と大漢論を論述した。また、その二つの理論の基礎に「自然」な気論があるという。考察の結果、王充の命定論と大漢論には「自己完結性」という「自然」性があり、つまり客観性があり、また、決定的な必然性がないので、王充の歴史観は、「歴史的歴史意識」ではあるが、ただし、その中には、時代の風潮に対しての独立性はあるものの、自己存在の意識、つまり「主体の意識」がない、というのである。

この文章だけを読めば、内山論文の意味をほとんどの人は理解できないと思われる。それを理解するために、著者の「董仲舒における歴史意識の問題」（『哲学研究』559、1992年）という論文を読まなければならない。その論文の中で、内山氏は、一つの「歴史意識」という概念を発明している。それによれば、歴史意識とは「人が歴史をいかに考えるか」ということであるが、その考えの中で「歴史を対象化しようとする事」といわれる「客観性」と、「歴史の中の自己（思想家自身－論者の解説）の位置、歴史のあり方を思索すること」とい

ゆる「主体性」を備えなければならない、として、「客観性」と「主体性」が備わっている場合は、この思想家の歴史観は「歴史意識」といえるが、備わっていなければ「非歴史的歴史意識」といわねばならぬ。内山氏の解説によれば、前漢時代に流行した循環論と尚古思想、あるいは後漢の讖緯の予定決定論と必然論には、「客観性」と「主体性」がないので、ほとんど「非歴史的歴史意識」であった、ということになる。

王充の場合は、命定論と大漠論が本当は「非歴史意識」だと言いたいのだが、その基礎に「気」という自然思想が存在し、つまり「客観性」があるので、その部分は内山の歴史標準に合致している。しかし、大漠論の国家の有り方に対する「主体性」は備わっていない。ただし、その主体性は、王充の批判精神にある。

内山氏の中国哲学思想史の研究自体の方法論に関わるので、この論文に対する評価は難しい。簡単に言えば、この「歴史意識」とは、王充研究の一種の新しい「フィルター」に過ぎない。内山氏は1960年代に「異端思想」という「フィルター」を作って、王充の思想がいかに異端思想であるかと言う論文を作成したことがある（内山俊彦、1966）。後に、氏の中国哲学史研究は、「自然」という「フィルター」を作りだし、それをもって中国古代思想家たちの思想は「自然」であるか、「非自然」であるかを計ることになった。その結果は『中国古代思想史における自然認識』（創文社昭和62年）という著作にまとめられているが、その「自然」という「フィルター」では、王充を計らなかった。その作業を終えた後に、氏はさらに「歴史意識」という新しい「フィルター」を作り、中国古代の思想家たちを図り始めた。王充はその図られた思想家の中の一人で、その歴史思想は「半分」ながらも「歴史意識」だと判定されたのである。

したがって、著者のそれまでの中国哲学思想研究は、一人の建築家のように、中国古代思想史における「自然意識」と「歴史意識」あるいは「異端的と非異端的」という三つの高樓を建てようとしたために、中国古代思想家の思想の中の自分の理論に合う部分を建築材料として取り入れて構築していくことであった。なるほど、これはなかなかやりやすい研究方法であったが、しかし、そのような構造先行法には大きな欠点も伴う。たとえば、先行構造の理論認識は一步間違えば、研究シリーズのすべての作品に悪影響を与えてしまうことと、自分の理論に合う部分のみを取り入れれば、自分の理論に合わない思想材料は無視してしまうこと、などがそれである。後者は実にこれまでの「フィルター」式王充研究の通病といえよう。

1997年

清水浩子 「王充の祭祀観についての一考察」『中国学研究』（大正大学）第16号、1997年（約6,000字、思想B）

王充の祭祀観を考察したもの。

「一、祭祀について」では、王充が述べた祭祀の意義について、その意義は「報功」と「修先」にあるとした。

「二、報功について」では、王充の言った「報功」は恩返しの意味で、つまり死者の生前の功労を償い、儀礼を行なうことであって、鬼神を祭るのではないとした。

「三、雩祭について」では、まず、王充は、自然災害が君主の主体行為とは関係ないとし

ながらも、民衆の願望を慰めるために行なった儀式としていることを述べた。そして、王充は董仲舒が土龍を設けて雨乞いをした行為に対して弁護していることについて述べている。

王充の二つの祭祀観がよく一つの文章にまとめられている。が、氏の他の幾つかの文章と同じく、いままでの研究成果を踏まえていないので、どれが自分の見解で、どれがいままでの共通の見解かわからないという欠点があるまま残っている。この文章にある見解は、いままでの研究成果から踏み出しておらず、大学の講義ではないかと思われる。

金谷 治 「事に思ふなし—王充—」「疑古の歴史3」1978—1979『武内義雄全集』月報連載／『金谷治中国思想論集』下巻平河出版社1997年（約2,000字、思想B）

「疑古」、つまり学問において今まで伝えてきたものを疑いながら展開していく方法論の歴史の中で、王充の「疑古」と批判はいかなる意味を持っているかについて論述した短いエッセイである。

1998年

石本裕之 「王充解三命説一考」『旭川国文』14、1998年（約8,000字、思想C）

比較的短い文章で、王充の命論の中の三命、つまり正命、随命、遭命について考察したものである。

まず、三命説の設立過程を述べて、その由来は遠く孟子、莊子、近く董仲舒あるいは漢に流行した緯書にあることを明らかにした。そして三命説の内容と特徴、特に「行○得○曰○命」という命論の方程式を論述した。

この論文の立論と三命論の特徴についての分析にはよい点が認められるが、先行者の研究については、ただ藤居岳人氏著「王充の『命』研究史」を読んだ位で、あまりにも無知であったので、自分が何を言いたいのか、結論が何であるのかは、明らかでない。論文の書き方にも明らかに欠陥があり、漢文を引用したり、書下し文を引用したり、両方を引用したりするのがそれである。

井ノ口哲也「王充研究関係論著目録—1983年—1996年」『中国研究集刊』往号、1998年（約15,000字、資料A）

13年間の王充研究の論著182点を集めたもの。

小方伴子 「『論衡』の使動用法」『中国語学』245、1998年10月（約15,000字、関連A）

『論衡』を研究資料として、漢語の中の「使動用法」を探る語学的な専門論文。その研究において、『論衡』の資料はあくまで一種の客観的なデータであり、王充・『論衡』の思想内容の研究とは無関係である。

山口 円 「相人と運命——『論衡』と『荀子』の比較考察——」『比較思想研究』24別冊、1998年3月（約3,000字、思想C）

王充の「相人」つまり人を占う考え方を考察し、荀子などとの比較を通じて、王充の見解を明らかにしたものである。

まず、『論衡』骨相篇にある相人に関する記述を取り上げ、王充の理論では人の容貌は運命が反映したものだとしている。

次に「相人」を認めない『荀子』の説を取り上げて、荀子の説は人物の判断に際して形より心のあり方を重視するものとした。そして、王充の「相人」説は、王充の運命観と関連しているとして、その運命観の底には王充の気論があり、気論は中国の伝統的な世界観を踏まえているので、王充の相人説は神秘的なものではないという結論に至っているのである。

この文章は日本比較思想学会信州地区平成九年度例会での発表原稿なので、また論文の形になっていないものの、論者の言いたいことは大体伝わる。ただし、文章の中にすでにいくつかの疑問点が存在しており、これらの疑点を越えなければ、論文にはならないと論者は考える。たとえば、王充の相人説と荀子の説とは矛盾していると言いながら、両者に共通の思想背景として儒家があるとしたが、このような矛盾については何の説明もない。また、結論部分で、王充の運命観の底に「気」論があり、その「気」論は中国の伝統的な世界観を踏まえているので、王充の相人説は神秘的なものではないとしたが、なぜ「気」論とつながっていれば神秘性がないと言い切れるのか、などがそれである。

1999年

井ノ口哲也「王充墓参観記」月刊《しにか》(SINICA) 1999年6月号(1,000字、資料B)

王充の古里は中国浙江省の上虞市であるのは周知のとおりであるが、その上虞市に清の嘉慶12年(1807年)に建てられた王充の墓があることについては、知っている人も少なからう。著者は1998年中国に留学に行ったときに、学会の合間をぬってそのお墓を参観して、この短文を書いて日本の人々にこの墓のことを紹介したのである。

山花哉夫 「王充の著述意識」『中国思想史研究』22、1999年12月(約20,000字、思想A)

『論衡』の頌漢諸篇は、符瑞を天人相関的な考え方を認める立場から肯定したうえで、その議論を進めている。一方、『論衡』のほかの文章は天人相関論を批判していると見られる。この矛盾をどう説明するか。著者は王充の著作の目的と態度を考察することで、上記の矛盾をうまく調和しようとした。

「一 著述の姿勢－「対作」を軸に－」では、王充の「批判論」と「頌漢論」の中の歴史伝承に対する認識の食い違いを指摘し、その認識の違いと矛盾は、著述の姿勢にあるとした。

「二 頌漢論の著述意識」では、頌漢論の中の歴史伝承に対する認識、特に「天人相関的」な事例を詳しく分析し、これらは批判論と全く違うことを指摘した。その上で、批判論は王充の自己の思考仕様の発露で、頌漢論は当代を賛美しようとしたもの、とした。

「三 頌漢論の著述動機」では、王充の頌漢論の目的は昇進を求めることにあると認めながら、その昇進の目標は「校書」に携わる役職を望んでいたとして、詳しく論証した。

「四 公車徴」では、王充の「公車徴」について考察した。結論として、王充はその徴集に応じたと言う。

この論文の見所は、王充思想の矛盾、特に「天人相関」に対する態度の二面性を明らかにしたことにある。しかし、王充思想のこの二面性をどう解釈するかについて、論者は王充が頌漢を通じて「校書」の役職に着きたかったからだ結論づけているが、やや唐突である。

というのは、論者の所見によれば、王充が認めているのは漢王朝に関する符瑞で、否定しているのは漢代以前の古代の符瑞である。肯定と否定、支持と批判は決して矛盾するものではなく、スタンスの違うものではないと思われる。また、王充の頌漢の目的は、漢王朝から「免罪」ではなく昇進を求めることにあったのを突き止めたのはよかったが、しかし、真の目的が、「校書」を求めることにあったか、それとももっと大きな野心が潜んでいたかについては、再考する余地があるのではないかと考える。なお、意外な収穫であるかもしれないが、著者は再三『論衡』『自紀篇』あるいは「対作篇」の、王充自身が『論衡』の著作態度は「虚妄をにくむ」ことにある、あるいは自分の一生は富貴名声を追求していない、と自画自賛したことを分析して、疑問を投げかけているが、今考えてみると、これはあくまでも王充の「自画自賛」に過ぎず、王充研究においては、それらを「額面通りに受け取る」こともできなければ、またそのまま引用して王充評価としてもいけない、とこれから王充研究に関わっていくわたしたちに考えさせるのである。

2001年

弐 和 順 「『論衡』における『論語』解釈の一斑」『村山吉広先生古希記念中国古典学論集』(汲古書院2001年)(約9,000字、思想B)

『論衡』にある『論語』に対する解釈を考察し、王充の孔子及び『論語』観を探ったもの。具体的に言えば、『論語』の「豈其然乎、豈其然乎」(憲問篇)、「故天縱之將聖、又多能也」(子罕篇)、「斯民也、三代之所以直道而行也」(衛靈公篇)、「賜不受命貨殖焉」(賜は命を受けずして貨殖す)」(先進篇)の四句に対する解釈を取り上げて、何晏の『論語集解』と対比しながら、その相違点を探った。その上で、その相違の原因と王充解釈の思想的根源を論述したものである。

井ノ口哲也 「『論』の立場—王充の「作」「述」否定の意味」『漢意とは何か・大久保隆郎教授退官記念論集』2001年(約16,666字、思想A)

「論」ずる賢者を自覚する王充の立場が当時の経学の在り方(創「作」する聖人・祖「述」する賢者の関係)に反発するものであったことを示唆したものであるが、『論衡』に見える後漢時代の経学の影響については、まだほとんど手がつけられていないのが現状であり、後漢経学研究のための一資料として『論衡』を扱う必要性を論者は痛感している。(著者自評、「日本の王充研究について—戦後の研究を中心に—」、台湾《先秦兩漢學術》創刊号、2004年予定)

山花哉夫 「王充性命論再考」『漢意とは何か・大久保隆郎教授退官記念論集』2001年(約15,000字、思想B)

三節に分けて、王充の「性命」と「命禄」に人為の可能性があるかどうかについて、今までの研究は明らかにしていないので、改めて検討したもの。

結論として、王充は「性命」論において、前期に書いたものでは人為の要素を積極的に認めていたが、後期になるとそれを制約する方向に転換し、最後は全く認めなくなったという。「命禄」については、天命がよくわからないので、人は富貴を得るために常に努力すべきだ

というのが王充の考え方だ、という。

王充の「性命」の人為要素に対する認識に差異があると指摘したのは一成果ではあるが、それが著述の前期と後期によって区別されるとするには、まず『論衡』の著述の順序を考察しなければならない。しかし、著者はそれについて全く触れていない。

大久保隆郎「わが自紀の篇」『漢意とは何か・大久保隆郎教授退官記念論集』2001年（約8,000字）

王充研究専門家の大久保先生が福島大学を退官するとき、自分の学究生涯を追憶する文章で、王充の真似をしてその文章を我が「自紀篇」としたものである。

鄧 紅 「王充評価に関する再考——胡適の王充評価を中心に」『大分県立藝術文化短期大学研究紀要』39、2001年12月（約20,000字、思想A）

1930年代に胡適が下した王充評価、つまり王充思想は唯物論、無鬼神論と科学精神の体现だという評価は、中国ではもちろんのこと、世界の中国哲学史学界でも定説になっていた。著者はその評価を全面的に再考し、異なる結論に至ったのである。なお、この論文は、著者が2003年1月に出した中国語著作『王充新八論』（中国社会科学出版社）のベースになったものである。

2002年

山花哉夫 「歴史伝承に対する王充の事実認識の諸問題」『中国思想史研究』25、2002年12月、（約16,000字、思想A）

『論衡』中の歴史伝承に対する王充の事実認識に、矛盾や食い違いが生じた理由を考察したもの。

「一」では、『論衡』の執筆の時期変化により生じた同じ歴史伝承に対する違う見解を考察した。

「二」では、王充自身が執筆当時に歴史伝承を誤って記憶していたか、もしくは勘違いしていたのではないかと思われる事例について検討した。

「三」では、同一の歴史伝承に対する王充の解釈が異なる事例を考察した。

「結語」では、『論衡』における歴史伝承に関する差異と矛盾の多くは、王充の頌漢論と一連の批判論との間に生じた著作意識の差異によるものであることを提起した。

王充の歴史伝承の認識の差異に注目して、その差異の源は王充の頌漢論と一連の批判論との間に生じた著作意識の差異によるものであることを認識しえたのはすばらしかった。ただし、著者の前掲の「王充の著述意識」（『中国思想史研究』22、1999年12月）に対して論者が述べたように、王充の歴史伝承に対する態度は、実際のところ、著作目的の差異によるものというよりも、同じ信念に基づいたもので、それはつまり頌漢論を鼓吹するために尚古論の否定を主張し、歴史伝承について都合のよい解釈をしただけなのではないかと思われる。

山口 円 「『論衡』における河図・洛書について」『中国思想史研究』25、2002年12月（約16,000字、思想A）

王充の讖緯観に、讖緯を批判するものと肯定するものという二つの傾向があることに注目し、讖緯の一つである河図・洛書に関する王充の観点到焦点をしばって考察したもの。

「一、河図洛書と王充」では、『論衡』の中にある河図・洛書と関係のある記述を考察し、その結果として、河図・洛書は可読性があるとしてほかの瑞応から区別して重要視しているが、天の有為を介在させることなく天の無作為の範囲で河図・洛書を理解し肯定したことを明らかにした。

「二、古帝王の異常風貌について」では、王充の古帝王（といってもほとんど聖人帝王）の異常風貌説を考察し、王充はその説を積極的に理解し肯定していることと、王充は「氣」の理論でそれを説明しようと努めていることを明らかにした。

「三、讖記・讖書」では、『論衡』が当時の讖記・讖書を取り上げた「讖」に関する記事はわずかであったが、河図・洛書を認めていた以上、緯書の存在も認めていた、ただし、それは彼自身の理論で説明できる部分に限られることを明らかにした。結論として、王充の讖緯観は、河図・洛書および讖書のようなものは認めているが、妄信的なものではなく、「氣」による自然理解でそれらの説明に努めたという。

王充の讖緯に対する二元的傾向を明らかにしたのはすばらしかったし、その二元的傾向をなるべく王充思想の批判精神あるいは合理性を擁護しながらうまく説明するに「努めた」精神にも脱帽である。しかし、果たしてその必要があるのか。また、「氣」の理論で讖緯論を展開することは、自然無作為性といえるだろうか。というのは、問題はやはり、王充の「氣」を「物質的」あるいは「自然無為」のものと理解すべきなのか、それで「氣」の多元性を認識できるのか、というところにある。たとえば、著者が引用した王充の語の中の「嘉禾の精、鳳凰の氣」のようなもの、あるいは鳳凰麒麟は「和氣」から生ずる、といったものに対して「氣」の「自然性」では解釈できないだろう。また、王充は何の目的で讖書と河図・洛書を認めたかについても言及されていない。

鄧 紅 「王充「命」論新議」『大分県立藝術文化短期大学研究紀要』40、2002年12月（約20,000字、思想A）

王充の「命論」を再び論じたもの。

著者は「王充の哲学体系における命論の役割」（『九州大学中国哲学論集』15、1989年10月）において、「命」論が王充の哲学体系のあらゆる領域で重要な役割を果たしていることを明らかにした。この論文では、一歩進んで「命」の役割を論じ、王充の哲学体系において「命」が最高概念、中枢、あるいは基本点であることを明らかにした。また、「命」と「氣」との関係についても探っている。この論文は、著者が2003年1月に出した中国語著作『王充新八論』（中国社会科学出版社）の第三論になったものであるが、第四論の「王充『氣論』新議」では、王充の哲学体系において、「命」は本体であり、「氣」は「命」を伝えて現す道具であり、「命」は形而上的な「体」であり、「氣」は形而下的な「用」である、と論じている。

2003年

福島 正 「『論衡』と『史通』」、『中国思想史研究』26、2003年12月（約30,000字、関連A）
王充の『論衡』と劉知幾の『史通』との関連を論ずるもの。

「一、劉知幾の王充評」では、劉知幾の王充評価を考察した。劉知幾は王充の孔子批判を評価したものの、王充の「自紀篇」の不孝を批判した。

「二、王充の歴史考証法」では王充の歴史考証法を七つの方面にまとめた。

「三、劉知幾の歴史考証法」では、劉知幾の考証法を考察し、五つの方面で王充の方法と一致するという結論に至った。

「四、第三の男—裴松之」では、『三国志』の著者裴松之の考証法を考察した。その結果、六つの方面で王充と一致するという結論に至った。

論証がとても詳しいが、強引なところもあった。周知のように、中国は歴史学が非常に発達している国であったが、王充はその中の傑出した歴史学者ではなかった。したがって、王充の歴史考証法の七つのポイントは、どれが王充の独自のものであるか、どれが中国の史学伝統なのか、はっきり弁別しないと、王充と劉知幾ないし裴松之との関連がつけられないのではないかと思われる。